

# 榮山江流域における 馬匹生産の受容と展開

The Acceptance and Development of Horse Breeding  
in the Yeongsan River Basin

諫早直人

ISAHAYA Naoto

はじめに

① 榮山江流域出土馬具の編年と系譜

② 榮山江流域における馬匹生産の受容と展開

おわりに

## 【論文要旨】

日本列島の馬匹生産のはじまりに榮山江流域からの渡来人（渡来集団）が大きな役割を果たした、という有力な仮説がある。主として日本列島における馬関連考古資料と榮山江流域系（産）土器の遺跡レベルでの共伴関係に依拠したこの仮説の最大の問題は、肝心の榮山江流域において、いつから、そしてどのような経緯で馬匹生産がはじまり、どのように展開したのかという議論が決定的に欠如している点にある。そこで本稿では、榮山江流域を中心とする全羅南道一帯から出土している馬関連考古資料、具体的には馬具とウマ遺存体の集成をおこない、榮山江流域における馬匹生産の受容と展開について現状での整理を試みた。

まず榮山江流域出土馬具の編年をおこない、榮山江流域における馬具の出現時期は熊津期以降、すなわち5世紀後葉以降であり、百済の他地域や新羅、加耶だけでなく、倭に比しても遅れることを確認した。また馬具の系譜が多様であることを明らかにし、榮山江流域における主体的な製作や、百済中枢との一元的な関係のもとで馬具が出現したわけではないことを論じた。次にウマ遺存体の出土事例についても検討をおこない、榮山江流域における馬の本格的な飼育開始はやはり熊津期以降とみられること、榮山江流域に現れる葬送儀礼の中で馬を犠牲にする風習は百済中枢ではなく、加耶などと関連することを指摘した。漢城陥落、熊津遷都を前後する頃、榮山江流域社会に大きな変化が現れることは、既に様々な考古資料をもとに議論されてきたが、少なくとも馬匹生産の受容に関しては、百済中枢との一元的な関係では理解できず、東方の加耶の諸地域（諸集団）との関係がより大きな役割を果たした可能性を提起した。

このように榮山江流域における馬匹生産の開始時期は日本列島よりも遅れることが明らかとなった以上、日本列島に馬匹生産をもたらした渡来人（渡来集団）の故地は、榮山江流域以外の地に求めるべきであろう。

【キーワード】 三国時代、榮山江流域、馬具、馬匹生産、ウマ遺存体

## はじめに

三国時代の栄山江流域は、泗泚期（538-660年）に入るまでの間、百済に完全には包摂されず、倭の諸地域と独自の交渉を積み重ねていたことが、日韓両国における発掘調査と研究の進展によって、明らかとなりつつある。栄山江流域と倭の交渉を物語る考古資料は枚挙に暇がないが、とりわけ日本列島各地から出土する鳥足文土器などの栄山江流域系（産）土器やU字形カマド枠については、栄山江流域を中心とする朝鮮半島南西部からの移住を含む渡来の考古学的証拠として注目されてきたところである〔田中<sup>清</sup>2005など〕。

彼ら栄山江流域からの渡来人が日本列島で果たした重要な役割の一つに、馬匹生産があったとみる意見がある。その契機となったのは、2001～2009年にかけておこなわれた大阪府葦屋北遺跡の発掘調査である。遺跡の立地する生駒山西麓、現在の四條畷市周辺は、古墳時代には河内湖がすぐそばまで及んでいた。かねてより『日本書紀』などにみえる「河内の馬飼」の本拠地と目されてきた地である〔野島1984など〕。葦屋北遺跡からも幼齢の個体を含む大量のウマ遺存体が出土し、古墳時代中期中葉～後葉（TK216～208型式期）には、組織的な馬匹生産が始まっていたことが明らかとなった〔大阪府教委2010・2012、大阪府立狭山池博物館2016など〕。この調査成果を受けて朴天秀は、葦屋北遺跡を含む生駒山西麓に鳥足文土器などの「栄山江流域産土器」やU字形土製カマド枠が密に分布することから、「近畿地域における牧が、栄山江流域からの渡来人によって成立」した可能性を提起した〔朴天秀2005：634〕。葦屋北遺跡の発掘成果や、それを受けた朴の仮説は、馬具に著しく偏っていた古墳時代の馬研究の閉塞感を打破し、馬匹生産そのものと直接関わる遺跡・遺構を軸に据えた議論を惹起した点において極めて重要であり、発掘調査担当者を中心に広く受け入れられている〔藤田2011、権五栄2012、宮崎2012など〕。しかしながら、馬関連考古資料と栄山江流域系（産）土器の遺跡レベルでの相伴関係に依拠したこの仮説には、以下の二つの課題を指摘することができる。

第一に、栄山江流域を中心とする全羅南道一帯において、いつ、どのような経緯で馬匹生産が始まり、どのように展開したのかという議論が欠如している点である。もちろん日本列島と同じ水準で論じられる程にデータが蓄積しているわけではないが、それは栄山江流域の馬匹生産の実態を不問に付したまま、この仮説を諒とする理由とはならないだろう。第二に、日本列島における初期馬具を中心とする馬関連考古資料の系譜、出現時期と、栄山江流域系（産）土器の出現時期の不一致である。この事実は、土器の系譜や出現時期に対する理解が確かであれば、<sup>(1)</sup>栄山江流域系（産）土器をもたらした集団が馬匹生産地において果たした役割が馬匹生産以外にあったことを強く示唆する。第二の問題点については、既に葦屋北遺跡を俎上に載せて指摘したところではあるが〔諫早2016b〕、第一の論点を深めることにより、それが意味するところは一層明瞭になるであろう。

本稿では、これまでに栄山江流域を中心とする全羅南道一帯から出土している馬関連考古資料、具体的には馬具とウマ遺存体の集成をおこない、第一の課題について現状での整理を試みる。

## ①……………栄山江流域出土馬具の編年と系譜

### 1. 全羅南道出土馬具概観

栄山江流域を中心とする現在の全羅南道からは、13の遺跡で三国時代馬具の出土が確認されている(表1)。またこれらの他に、紀元前2世紀前半から紀元後1世紀後半頃にかけて形成された低湿地遺跡である光州新昌洞遺跡から黒漆塗り木製馬車部材〔国立光州博物館2002〕が、光陽馬老山城から統一新羅時代の装飾馬具セットや鉄製壺鐙〔成正鏞ほか2007〕が出土している。

三国時代馬具は13例中、実に11例が古墳埋葬施設からの出土で、この他に山城と住居址から1例ずつ出土している。分布は栄山江流域とその周辺に集中し、金銀装の装飾馬具は一層その傾向が強い(図1)。ただし、在地を代表する墓制である甕棺に伴う出土事例は、横穴式石室に4基の甕棺が順次設置された羅州伏岩里3号墳96年石室以外になく、大型甕棺古墳の中心地である羅州潘南古墳群周辺でもまだ出土していない。

### 2. 全羅南道出土馬具の編年

栄山江流域を中心とする全羅南道出土の三国時代馬具については、これまでも韓国人研究者によって検討がなされており〔柳昌煥2004・2018、権度希2006a・b、金洛中2010など〕、筆者も百済馬具を編年する際に、栄山江流域出土馬具を含めて検討をおこなったことがある(図2)〔諫早2012a(以下、前稿とする)〕。筆者を含めてこれらの先行研究においては、墓制や土器などから百済ではなく大加耶との強い関わりが想定される〔李東熙2005など〕全羅南道東部の蟾津江流域から出土した馬具を、分析対象から外してきた。しかしながら以下にみるように、栄山江流域出土馬具の中にも栄山江流域を含む百済で製作されたとは即断できない資料が存在する。百済馬具=百済で製作された馬具、という前提のもとで理解することの問題点は、栄山江流域から出土する馬具に関しても同じである。馬具は土器や甕棺などと違い、栄山江流域で独自に展開した形跡が認められず、また栄山江流域のみならず、蟾津江流域も含めた全羅南道一帯が、少なくとも泗泚期には百済の領域支配に組み込まれたことが文献史料だけでなく考古資料によっても裏付けられている以上、まずは同時期の百済の他地域から出土する馬具と比較し、共通点と差異点を浮き彫りにすることが肝要と考える。そこで以下では、前稿以後に出土した資料も加えつつ、栄山江流域を中心とする全羅南道出土の三国時代馬具が、百済馬具編年の中でどのように位置づけられるのか検討してみたい。

**百済Ⅲ段階以前(5世紀中葉以前)** およそ漢城期に製作されたとみられる百済Ⅰ～Ⅲ段階までの馬具の分布は、現状では全羅北道北部の完州上雲里遺跡を南限とし、栄山江流域からは5世紀中葉以前、すなわち漢城期にまで確実に遡る馬具は出土していない。ただし冠や飾履などの漢城期百済の着装型金工品が、南海岸の高興雁洞古墳で出土していることをふまえれば、栄山江流域からも今後、漢城期に遡る馬具が散発的に出土する可能性は十分ある。

**百済Ⅳ段階(5世紀後葉～末)** 筆者は前稿において、栄山江流域で馬具が確実に出土しはじめるのは、百済Ⅴ段階、すなわち6世紀初～前葉とみたが〔諫早2012a:224〕、国立羅州文化財研究

所によって発掘され、最近報告書が刊行された羅州伏岩里丁村古墳1号石室出土馬具の中には、確実に百済Ⅳ段階、すなわち5世紀後葉～末にまで遡るものがある〔諫早2016a〕。丁村古墳は伏岩里3号墳から600mほど東に離れた蠶崖山の斜面に築かれた一辺30～33mの葺石をもつ方台形墳である。発掘調査の結果、馬具が出土した1号石室を中心に、漢城期末から泗泚期にかけて甕棺、竪穴式石槨、横穴式石室など計14基の埋葬施設が順次設置されたことが明らかとなった〔国立羅州文化財研究所2017〕。なお馬具が副葬されていたのは1号石室のみである。

1号石室からは、f字形鏡板轡1点、複環式環板轡2点、木心鉄板張輪鐙1対、鉄製輪鐙1対、鉄製組合式辻金具片17点（方形金具4点、爪形金具13点）、鉄製鉸具13点などの各種馬具が、玄室東南隅よりまとまって出土した(図3)。報告者は周囲より鉄釘が多数出土していることなどから、馬具類はほかの副葬品とともに木箱に納められていたと推定している。轡を基準にすれば、少なくとも3セット分の馬具が副葬されたとみてよいだろう。以下、丁村古墳の出土馬具の年代的位置づけを考える上で、重要な轡と鐙について検討をおこなう。

まずは鉄製f字形鏡板轡である(図4-1)。f字形鏡板轡は5世紀後葉頃に百済、加耶、倭でほぼ同時に出現し、どこが最初に考案ないし受容したのかについては、まだ意見の一致をみていない〔諫早2013〕。鉄製のf字形鏡板轡は鉄地金銅張のf字形鏡板轡を模倣したものとみられており、現状では古墳時代中期後葉～末の日本列島に分布が集中する〔中條2003〕。朝鮮半島南部では釜山Ⅳ段階（5世紀後葉～末）の釜山福泉洞23号墳出土例(図6-1)に続



図1 全羅南道出土三国時代馬具の分布(番号は表1と対応)

表1 全羅南道出土三国時代馬具一覧

	段階	地域	遺跡名	出土遺構	出土馬具	出典
1	百済Ⅳ段階	羅州	伏岩里丁村古墳1号石室	横穴式石室	f字形鏡板轡, 複環式環板轡, 木鉄板張輪鐙, 鉄製輪鐙, 板状別造辻金具, 鉸具	国立羅州文化財研究所2017
2	百済Ⅳ～Ⅴ段階	靈光	鶴丁里大川3号墳	横穴式石室	円環轡, 鑢轡片, 飾金具, 鉸具	木浦大学校博物館2000
3	百済Ⅳ～Ⅴ段階	潭陽	齋月里古墳	冢石墓	鑢轡, 鉄製輪鐙	崔夢龍1976
4	百済Ⅳ～Ⅴ段階	和順	千德里懷徳3号墳	横穴式石室	鉄製輪鐙, 方形脚金具, 鉸具	大韓文化財研究院2019
5	百済Ⅴ段階	咸平	新徳古墳	横穴式石室	鑢轡, 木心鉄板装壺鐙, 鉢状雲珠・辻金具, 鞍金具, 鉸具	国立中央博物館1999, 金洛中2010
6	百済Ⅴ段階	羅州	伏岩里3号墳96年石室	横穴式石室	心葉形鏡板轡, 心葉形杏葉, 木心鉄板装壺鐙, 鉢状辻金具	国立文化財研究所2001
7	百済Ⅴ段階	和順	内坪里サチョン古墳	横穴式石室	鉢状雲珠	영희文化遺産研究院2016
8	百済Ⅴ段階	海南	月松里造山古墳	横穴式石室	f字形鏡板轡, 劍菱形杏葉, 鉄製輪鐙, 馬鈴	国立光州博物館ほか1984
9	百済Ⅵ段階	潭陽	大峙里遺跡ナ地区4号住居址	住居址	鉄製壺鐙(壺部木製)	湖南文化財研究院2004
10	百済Ⅵ段階	麗水	鼓洛山城貯水施設1	貯水施設	環板轡	順天大学校博物館2003
11	大加耶Ⅲ段階	順天	雲坪里M3号墳	竪穴式石室	楕円形鏡板轡, 木心鉄板装壺鐙, 鉄環, 鉸具	順天大学校博物館2010
12	大加耶Ⅳ段階	順天	雲坪里M4号墳	竪穴式石室	X字形環板轡, 板状辻金具, 飾金具, 鉸具	順天大学校博物館2014
13	新羅Ⅴ段階	順天	雲坪里M5号墳	竪穴式石室	心葉形鏡板轡, 木心鉄板張輪鐙, 貝装辻金具, 鉸具	順天大学校博物館2014

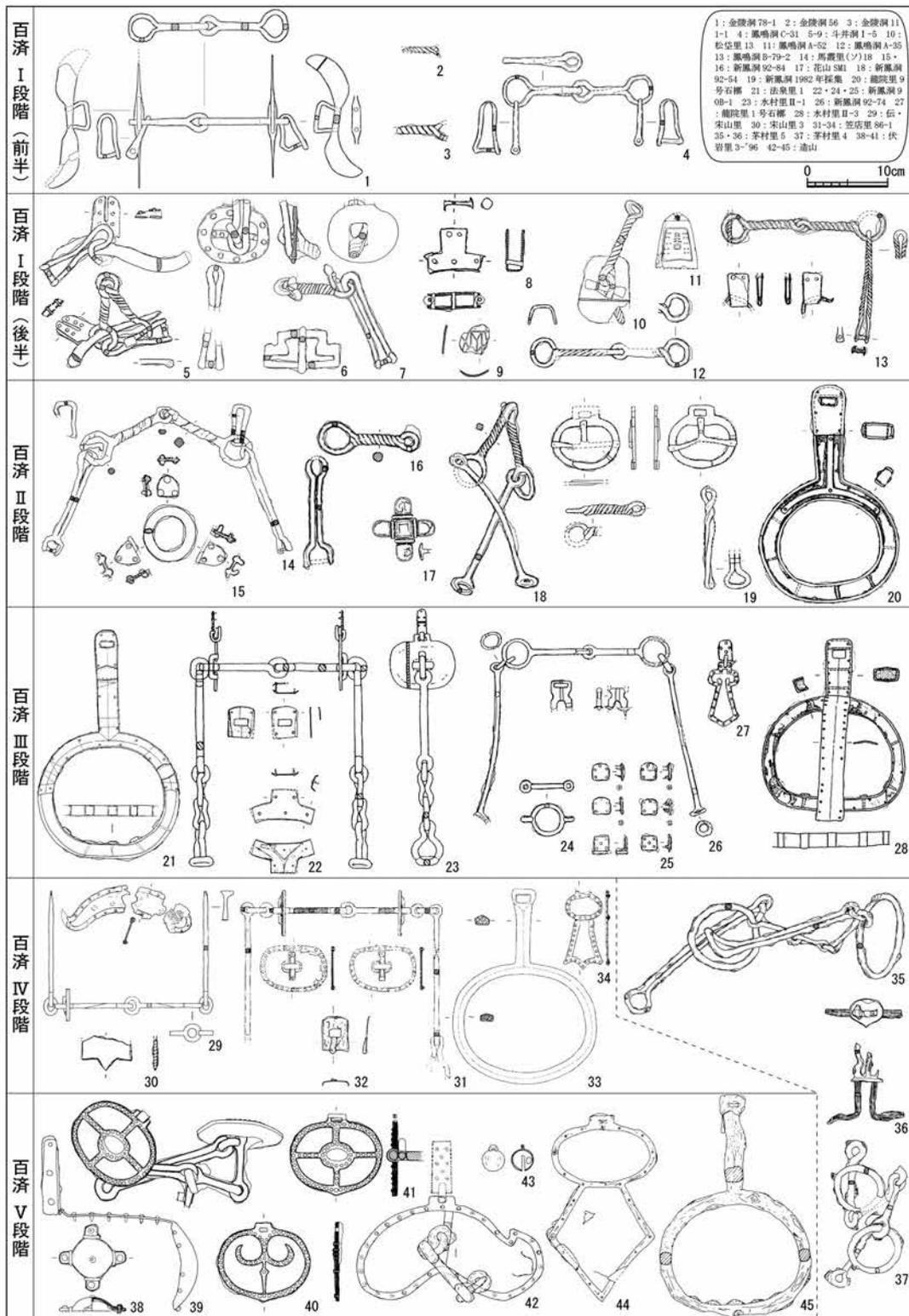


図2 百濟馬具の編年(S = 1/8)

いて2例目である。報告者は鉄製地板に円頭鋌を0.4cm間隔で打っているとするが、実見したところ裏面に鋌脚はなく凹状をなしており、報告書に掲載されているX線透過写真にも鋌脚らしきものは写っていない。一枚板であることもふまえれば、これは鋌留めではなく裏からの打ち出しとみるべきだろう。このような鏡板周縁の打ち出し列点（偽鋌）は、ON46型式の須恵器と共伴し、やはり初期資料の一つである福井県鳥越山古墳出土鉄製f字形鏡板轡（図6-2）にも認められ、本例はf字形鏡板轡としては2例目にあたる。丁村古墳出土例は数多くあるf字形鏡板轡で唯一、2條線引手をもつなど位置づけが難しいが、幅が細く全長の短い鏡板形態からみて、初期資料の範疇で理解することは許されよう<sup>(2)</sup>。

轡はこの他に複環式環板轡が2点出土している（図4-2・3）。いずれも滝沢誠 [1992] 分類のD類に該当する。両者は銜内環に違いがみられるものの、基本的なつくりは同じである。複環式環板轡D類は朝鮮半島南部では洛東江以東地方の新羅を中心に分布し、環板の形態や振りを加える点は大邱時至地区95号石槨墓出土例（図7-1）に近いが、丁村古墳から出土した2例にみられる遊環を介して銜と環板、2條線引手を連結する構造は、大加耶Ⅳ段階（6世紀初～前葉）の南原斗洛里1号墳出土例（図7-2）にのみ認められるものである [諫早 2016a]。複雑に折り曲げた鉄棒の両端を環体上部に鍛接し、立聞部とする特徴も共有しており、丁村古墳から出土した2例と斗洛里1号墳出土例は、非常に近い環境下において製作された可能性が高い。

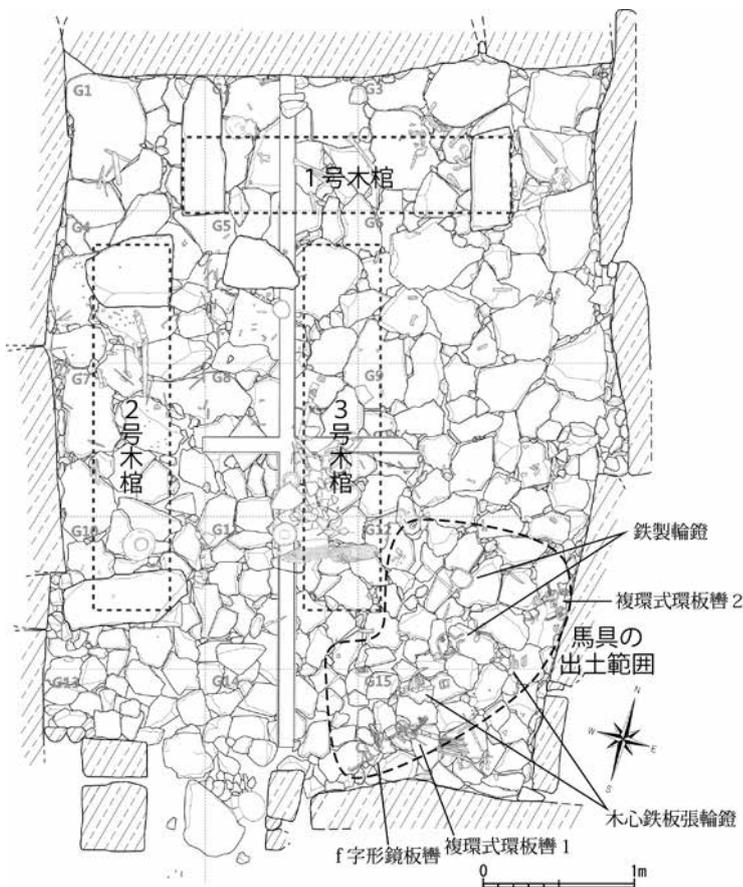


図3 羅州丁村古墳1号石室出土状況図 (S = 1/50)

鏡は木心鉄板張輪鏡1対と鉄製輪鏡1対が出土している。前者は柄部前後面の鉄板が二段に分かれ、幅広の踏込部をもつ柳昌煥 [1995] 分類のⅡB1式に該当し、輪部側面鉄板の端部を三角形に切り落としている（図5-4・5）。木心部分は樹種同定の結果、クワ（罌木）属であることが判明している<sup>(3)</sup>。かつて千賀久は、輪部側面鉄板の端部が三角形をなす木心鉄板張輪鏡について、朝鮮半島に類例が確認できない点、構造が簡略である点などから、百濟や加耶に系譜を求めつつも、日本列島で製作された可能性を提示した [千賀 1994 など]。その後、

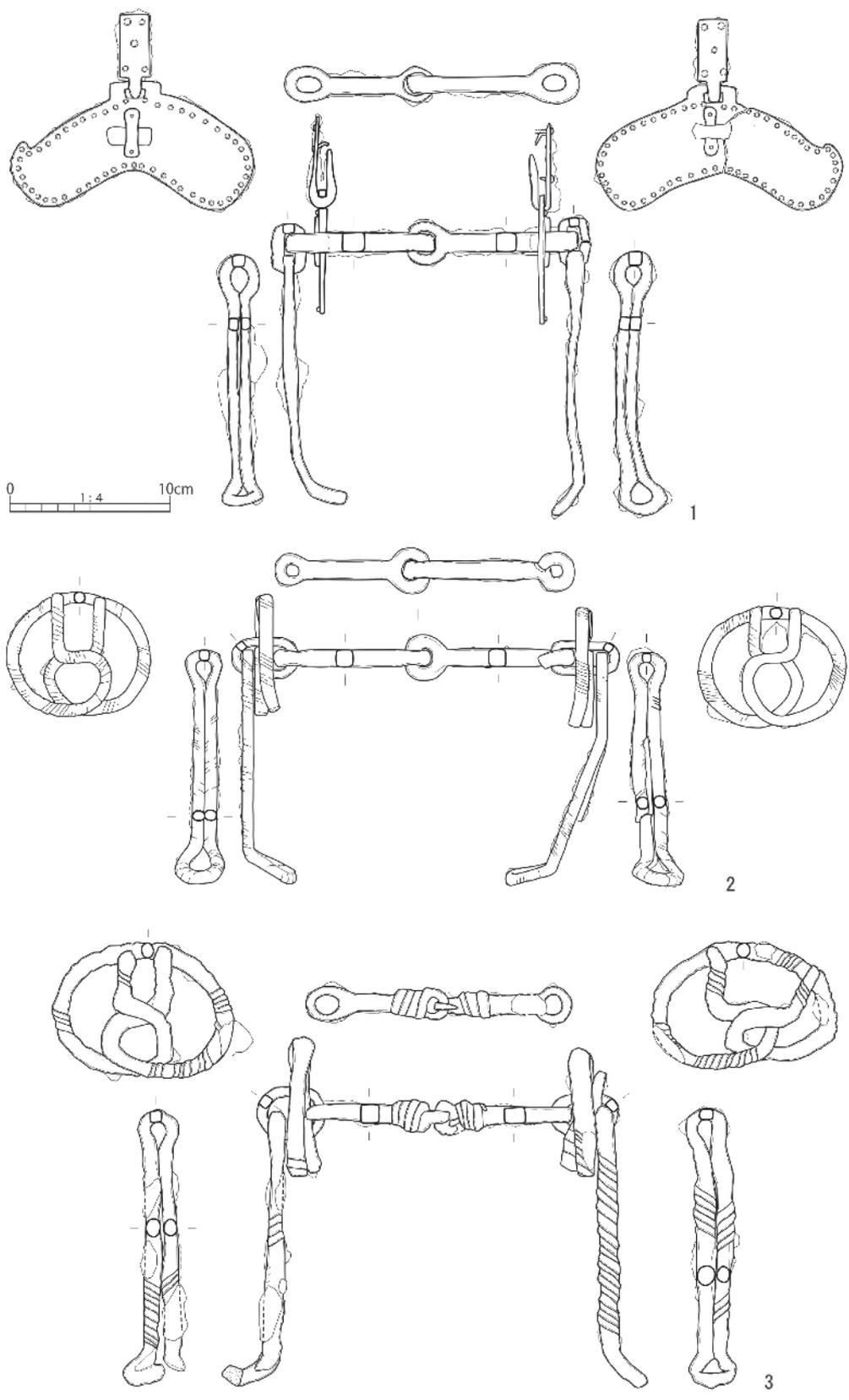


図4 羅州 丁村古墳1号石室出土馬具(1)(S = 1/4)

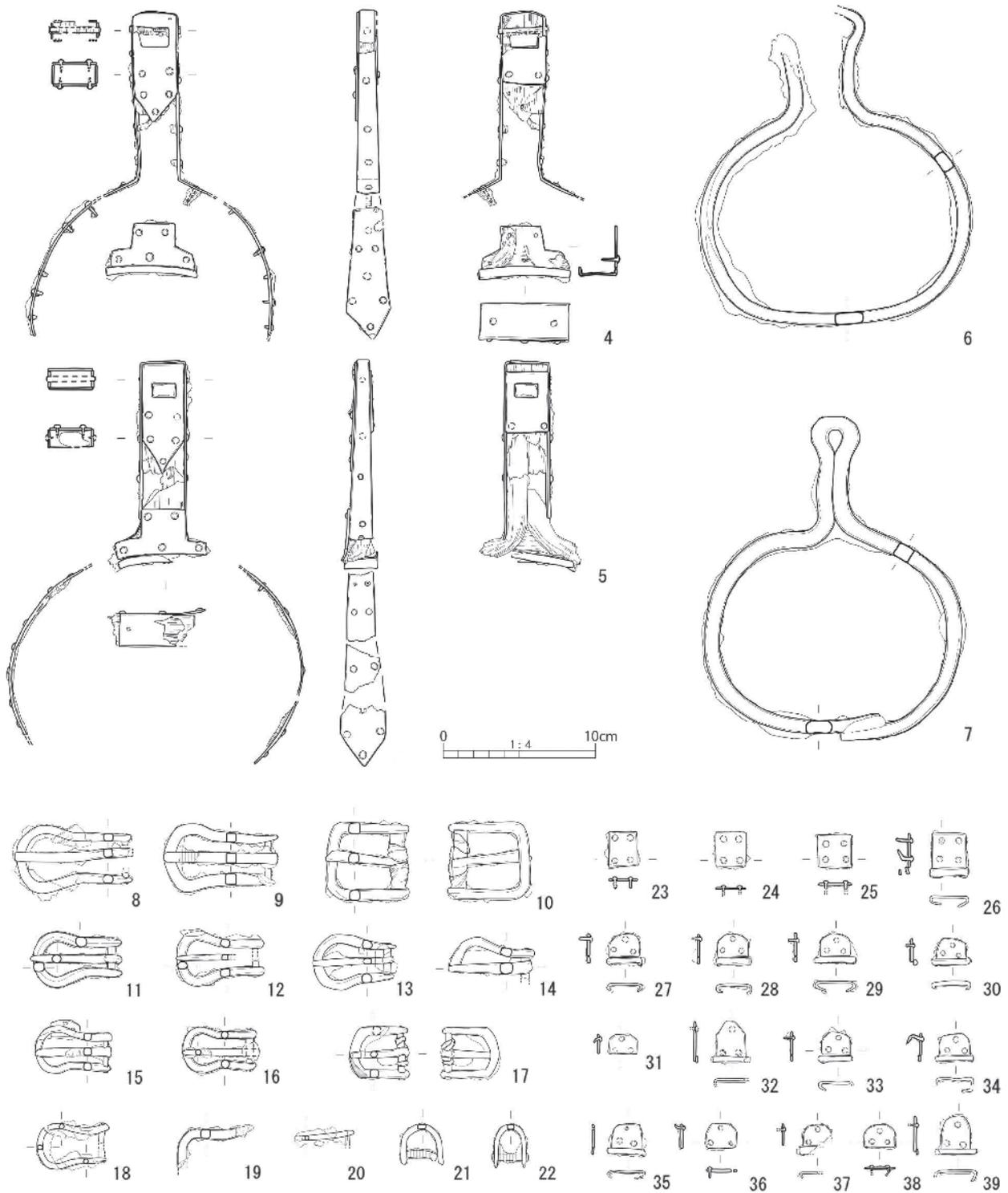


图 5 羅州 丁村古墳 1 号石室出土馬具 (2) (S = 1/4)

百済Ⅲ段階（5世紀前葉～中葉）の清州新鳳洞 92-60 号墳出土例や大加耶Ⅲ段階（5世紀後葉～末）の陝川玉田 20 号墳出土例などで側面鉄板の端部を三角形に切り落とす事例がみつかってきており（図 8-1・2）〔諫早 2012a : 279, 高田 2014 : 105〕, これらは柄部前後面の鉄板が二段に分かれる点も丁村古墳出土例と共通する。輪部側面鉄板の端部形状は、輪部幅よりも小さい朝鮮半島南部の 2 例よりも日本列島出土事例とよく似ているが、日本列島からは柄部前後面の鉄板が二段に分かれるⅡB<sub>1</sub>式木心鉄板張輪鐙がまだ出土していないことをふまえれば、両者を繋ぐ過渡期的な資料として位置づけることが可能である。その製作地は、倭よりは百済ないし大加耶に求めるべきであろう。出土状況からみて f 字形鏡板轡ないし複環式環板轡 1 とセットを構成する可能性が高い。

鉄製輪鐙は 1 本の鉄棒を折り曲げて柄部と輪部をつくる

珍しいものである（図 5-6・7）。鉄製輪鐙の形態は I 字形柄部に 1 條の踏込部をもつ木心輪鐙系から、5 世紀後葉以降、次第に T 字形柄部や 2 條ないし 3 條の踏込部をもつ非木心輪鐙系へと変遷していくことがわかっており〔諫早 2010a〕, 丁村古墳出土例は後者に該当する。踏込部のところで鉄棒の両端を重ね合わせて鍛接する特徴は、百済Ⅲ段階の清州新鳳洞 92-83 号墳出土例（図 8-3）など、筆者が以前に「飯綱社型」として設定した木心輪鐙系の鉄製輪鐙に認められることから、非木心輪鐙系の中でも出現期の資料の一つとして理解しておきたい。<sup>(4)</sup>柄部が 2 條の鉄棒からなる点を木心輪鐙のルジメントとして理解することも可能であろう。出土状況からみて複環式環板轡 2 とセットを構成する可能性が高い。

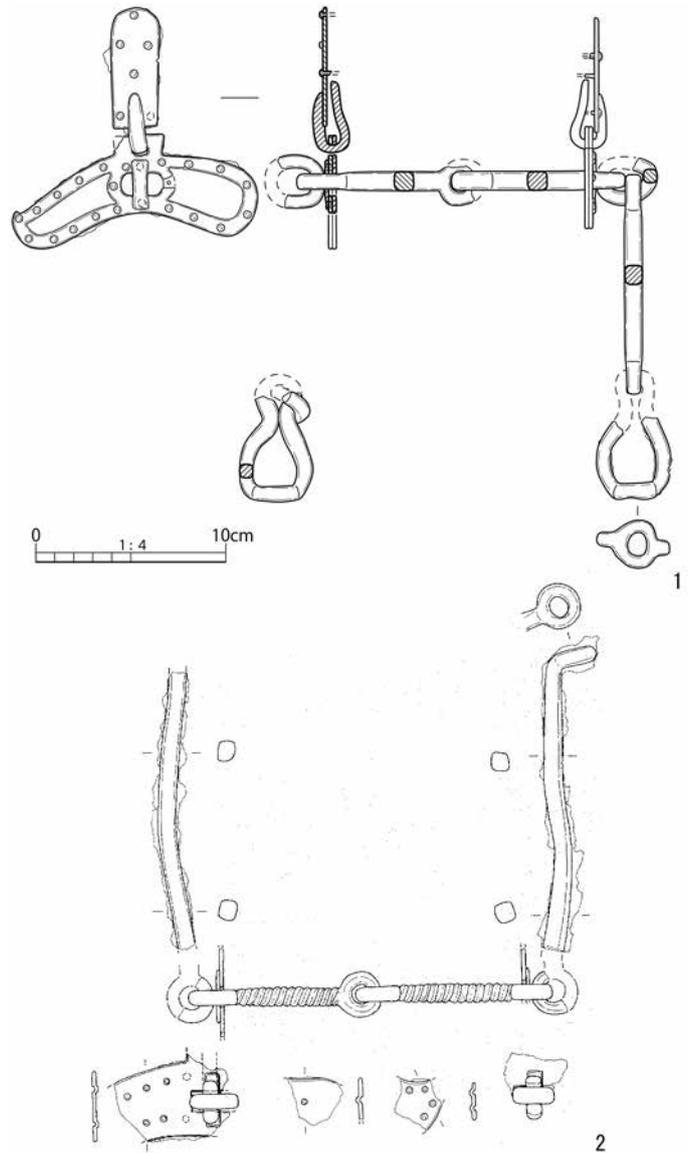


図 6 羅州 丁村古墳 1 号石室出土馬具の類例 (1) (S = 1/4)

1 : 釜山 福泉洞 23 号墳 2 : 福井 鳥越山古墳

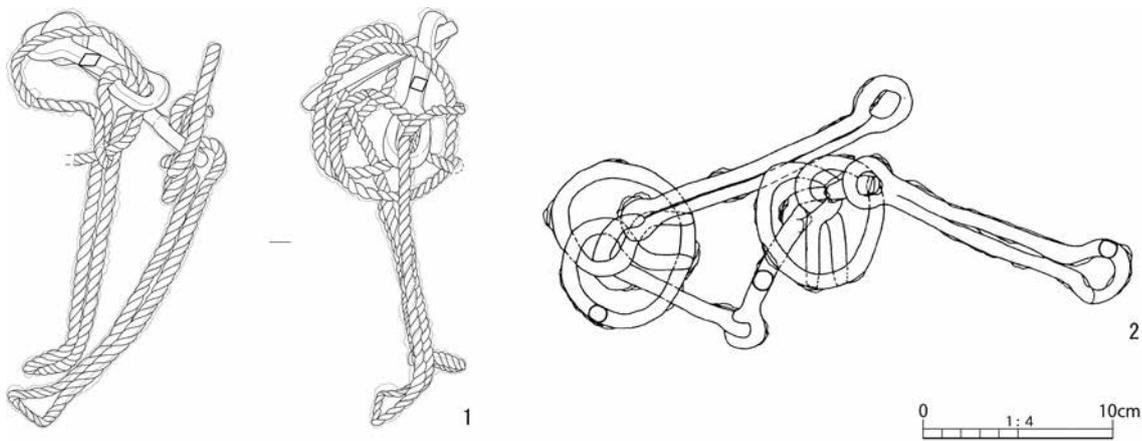


図7 羅州 丁村古墳1号石室出土馬具の類例(2) (S = 1/4)

1: 大邱 時至地区 95号石槨墓 2: 南原 斗洛里1号墳

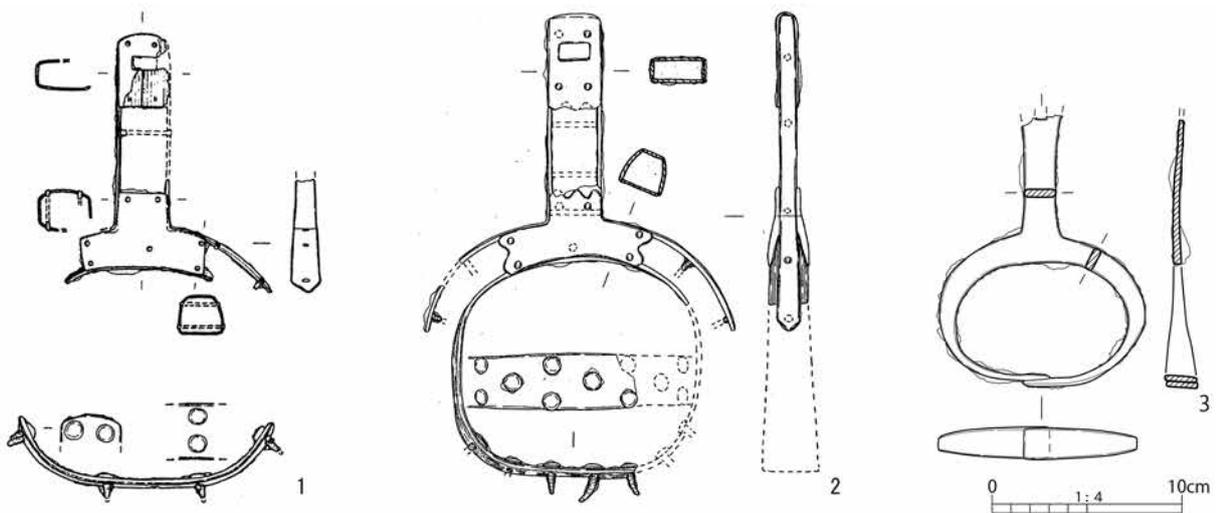


図8 羅州 丁村古墳1号石室出土馬具の類例(3) (S = 1/4)

1: 清州 新鳳洞 92-60号墳 2: 陝川 玉田 20号墳 3: 清州 新鳳洞 92-83号墳

このように丁村古墳出土馬具の多くは百済Ⅳ段階(併行)に製作されたとみることが可能である。現時点において、榮山江流域で最も古い馬具とってよいだろう。ただし、これらの中で2点の複環式環板轡については、斗洛里1号墳出土例を参考にすれば、大加耶Ⅳ段階≒百済Ⅴ段階にまで下げて理解するのが妥当である。初葬の1号木棺に伴うほかの副葬品が判然とせず、すべての馬具が2号木棺ないし3号木棺の追葬に伴う副葬品である可能性が高いが、いずれにせよ製作時期を異にする馬具が存在するとみるべきだろう<sup>(5)</sup>。

この他に蟾津江流域の順天雲坪里 M3号墳から出土した馬具もこの段階に位置づけられる。以前に検討しているため詳述はしないが、墓制や副葬土器などから大加耶古墳とみるのが妥当であり、馬具もまた大加耶Ⅲ段階の特徴を示す[諫早 2010b]。

**百済Ⅴ段階(6世紀初～前葉)** 榮山江流域で馬具が最も多く出土する時期である。熊津期の後

半を中心とする年代が想定される。後で詳しくみる咸平新徳古墳（1号墳）、羅州伏岩里3号墳96年石室、海南月松里造山古墳から出土した装飾馬具セットや、和順内坪里サチョン古墳から出土した鉢状雲珠がこの段階に該当する。このほか霊光鶴丁里大川3号墳や潭陽齋月里古墳、和順千德里懐徳3号墳から出土した馬具は、年代を絞り込む手がかりが乏しいものの、少なくとも熊津期、すなわち百済Ⅳ～Ⅴ段階の馬具であることは確かであり、共伴遺物などからみてこの段階に位置づけられる可能性が高い。

また、蟾津江流域の順天雲坪里M4号墳とM5号墳から出土した馬具もこの頃に製作されたとみられる。ただし報告者が既に指摘しているように、前者から出土した遊環をもつ環板轡A類は高霊池山洞45号墳出土例と類似し、板状辻金具なども含めて大加耶Ⅳ段階（6世紀初～前葉）に、そして十字文心葉形鏡板轡や貝装辻金具、木心鉄板張輪鐙などからなる後者も、新羅からの移入品とみられ、新羅Ⅴ段階（6世紀初～前葉）にそれぞれ位置づけられる〔順天大学校博物館2014〕。栄山江流域から出土した馬具も形態が多様で、後述するように複数の製作地が想定されるが、蟾津江流域から出土したこれらに関しては、少なくとも百済以外の地域で製作されたとみるのが妥当であろう。

**百済Ⅵ段階（6世紀中葉以降）** 出土事例が少ないため前稿では設定しなかったが、泗泚期（538～660年）に位置づけられる馬具を、百済Ⅵ段階とする。麗水鼓洛山城貯水施設1と潭陽大峙里遺跡ナ地区4号住居址から出土した馬具がこの段階に該当する。

前者は城内に設けられた直径約5.2m、深さ2.2mの石積みの円形貯水施設で、下層から泗泚期を中心とする土器類などと共に環板轡C類が出土している〔順天大学校博物館2003〕。環板轡C類は高句麗Ⅵ段階（5世紀後葉以降）に新たに出現する環板型式で〔諫早2008〕、遼寧省桓仁五女山城JC区や漢江流域の九里峨嵯山第4堡壘から類例が出土している（図9）〔成正鏞ほか2007〕。

後者は一辺3～4m程のカマドをもつ竪穴建物で、床面から瓶形土器や帯状把手付壺などの泗泚様式土器と共に鉄木併用杓子形壺鐙が1対出土している〔湖南文化財研究院2004〕。柄部と輪部は鉄製で、輪部内面に付着する木質から輪部の内側に別造りの木製壺部を嵌め込み、鋳で固定したものとみられる。上述の五女山城JC区からも同じ構造の壺鐙が出土している（図10）。両者はいずれも百済では他に類例がなく、細かな年代を絞り込むことが難しいものの、形態や共伴遺物からみて統一新羅時代にまで下ることはない。

これらが高句麗からの移入品である可能性は排除しないが、どちらも形態的にも技術的にも十分百済領域において製作が可能である。泗泚期の考古資料には様々な面で高句麗の影響が看取され、在地化していく様相も確認されていることをふまえれば〔李炳鏞2015、土田2017など〕、これらをあえて移入品とみる積極的な理由はないだろう。

**小 結** 栄山江流域には現状では百済Ⅲ段階以前の馬具は出土しておらず、百済Ⅳ段階の丁村古墳を嚆矢とする。馬具の分期である百済Ⅲ段階と百済Ⅳ段階が、漢城期と熊津期という政治史的時期区分と厳密に一致するわけではないが、百済Ⅲ段階の馬具が存在しないということは、確実に漢城期に位置づけられる馬具が、栄山江流域には存在しないことを意味する。もちろん後述する光州新昌洞遺跡の木製馬車部材を考慮すれば、今後、漢城期あるいはもっと古くにまで遡る馬具が出土する可能性はあるが、現時点でそのことを積極的に議論できる材料はない。また、ほとんどが百済

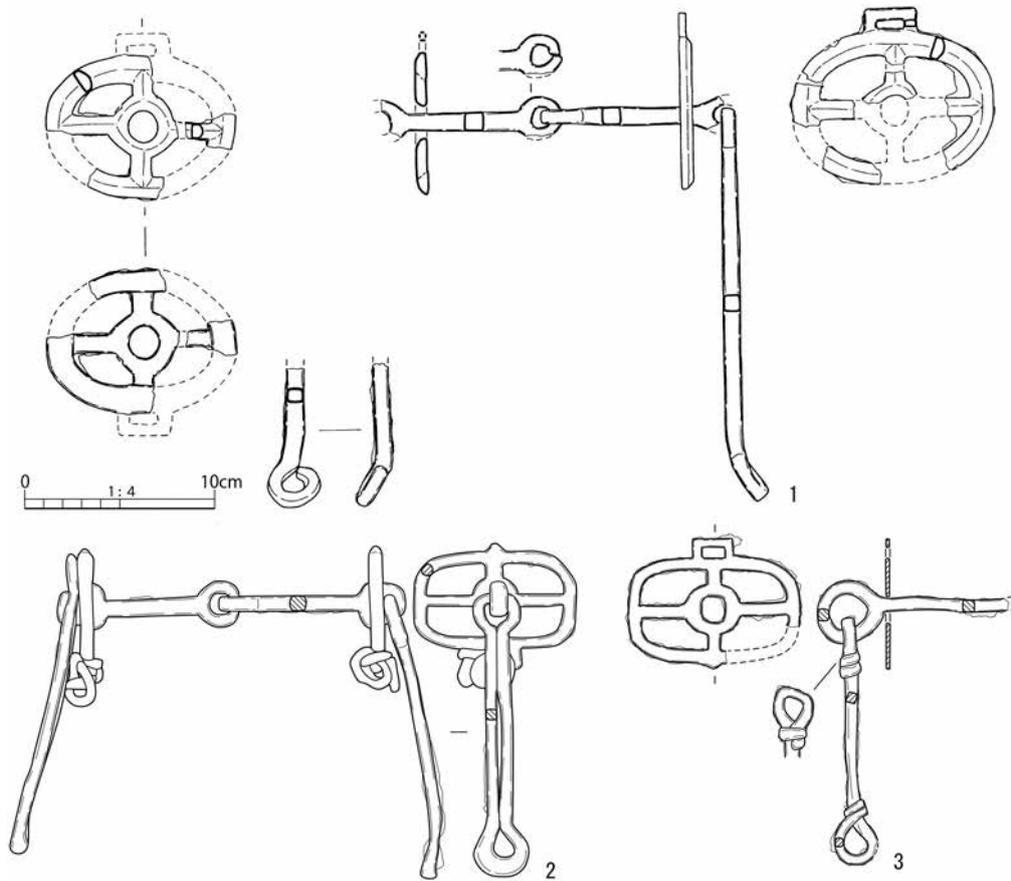


図9 麗水 鼓洛山城出土馬具とその類例 (S = 1/4)

1: 麗水 鼓洛山城 2: 桓仁 五女山城 JC 区 3: 九里 峨嵯山第4 堡塁

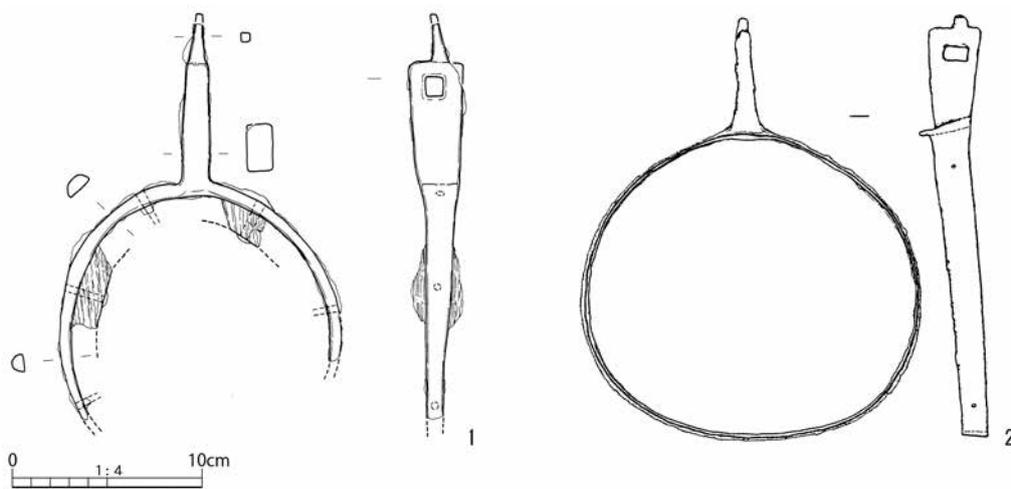


図10 潭陽 大峙里遺跡出土馬具とその類例 (S = 1/4)

1: 潭陽 大峙里遺跡 2: 桓仁 五女山城 JC 区

V段階に位置づけられることも栄山江流域の特徴である。百済の多くの地域では百済V段階になると、馬具副葬が低調となるのに対し、栄山江流域では百済IV段階に開始し、V段階にピークを迎え、VI段階に入ると百済の他地域同様、まったく確認されなくなる。ここでは栄山江流域における馬具の出現時期が百済の他地域はもちろん、周辺の加耶や新羅、さらには倭と比べても大きく遅れることを確認しておきたい。

なお、墓制や土器から栄山江流域と一緒に扱われることの多い全羅北道南部の高敞地域でも、鳳德里1号墳4号石室や前方後円墳である七岩里古墳から馬具が出土している。詳細は改めて検討すると、前者は百済IV段階、後者は百済V段階に位置づけられるもので、栄山江流域と同じく、高敞地域からも現状では百済IV段階を遡るものは出土していない。

### 3. 栄山江流域出土装飾馬具セットの系譜

全羅南道出土馬具は、たとえ蟾津江流域を除いたとしても、形態や組み合わせが非常に多様であり、栄山江流域における主体的な馬具生産は想定しがたい。これまで主だった馬具の系譜については整理されてきたが〔金洛中 2010, 諫早 2012a, 柳昌煥 2018〕、同一古墳出土馬具がどの時点で同一の馬装を構成したかについては十分な検討がなされてこなかった。そこでここからは、百済V段階の伏岩里3号墳、新徳古墳、造山古墳から出土した装飾馬具セットを俎上に載せ、同じ古墳に副葬され、おそらくは同じ馬装を構成したとみられる各種馬具が同一地域に系譜を求められるか否か、すなわち同一地域で製作されたかどうかについて検討してみよう。

**伏岩里3号墳96年石室出土馬具** 羅州伏岩里3号墳は一辺36～42mの方台形墳で、4基が現存する伏岩里古墳群の中で最も大きな古墳である。発掘調査の結果、3世紀中葉から7世紀初めにかけて墳丘を拡張しながら、甕棺、木棺、竪穴式石室、横穴式石室など41基以上の埋葬施設を順次構築したことが明らかとなっている。馬具（鉄地金銀装十字文楕円形鏡板轡、木心鉄板装壺鐙、鉄地金銀装三葉文心葉形杏葉、鉄地金銅張辻金具）は最初に築造された横穴式石室である96年石室にのみ副葬されていた〔国立文化財研究所 2001〕。96年石室には4基の甕棺が順次安置されており、馬具は玄室北東部に最初に安置された1号甕棺の棺台石と壁石の間からまとまって出土している。

このうち、十字文心葉形鏡板轡（図2-41）や三葉文心葉形杏葉（図2-40）については、百済には類例がなく、新羅を中心に分布する。しかしながら、千賀久〔2004〕の「非新羅系」馬具の特徴である鉤状吊金具をもつこと、神啓崇〔2016〕も指摘するように遊環を介して引手を鏡板の裏側で連結するものや、銜外環を隠すために鏡板表側に取り付けられた覆金具が新羅中枢ではまだ確認されていないことから、新羅中枢での製作は考えにくい。筆者は、覆金具をもつ鏡板轡の分布の核が大加耶IV段階（6世紀初～前葉）の高霊池山洞518号墳出土例（図11-1）をはじめ大加耶にあることから、伏岩里3号墳出土例は同時期に「新羅系」馬具を模倣・改造していた形跡の認められる〔千賀 2004, 諫早 2012a〕大加耶からもたらされた可能性が高いと考えている。発掘資料ではないものの、大加耶V段階（6世紀中葉）に位置づけられる伝高霊池山洞出土十字文心葉形鏡板轡（図11-2）と、引手形態（二條線引手）や連結構造が一致することはその可能性を強く後押しする。共伴する鉄地金銅張鉢状辻金具（図2-38）も責金具や円頭鋏を鉄地銀張とする点が、鏡板や杏葉と共通するため、セットで製作されたとみて大過ないだろう。鳩胸金具先端が匙状に広がる木心鉄板装壺鐙（図

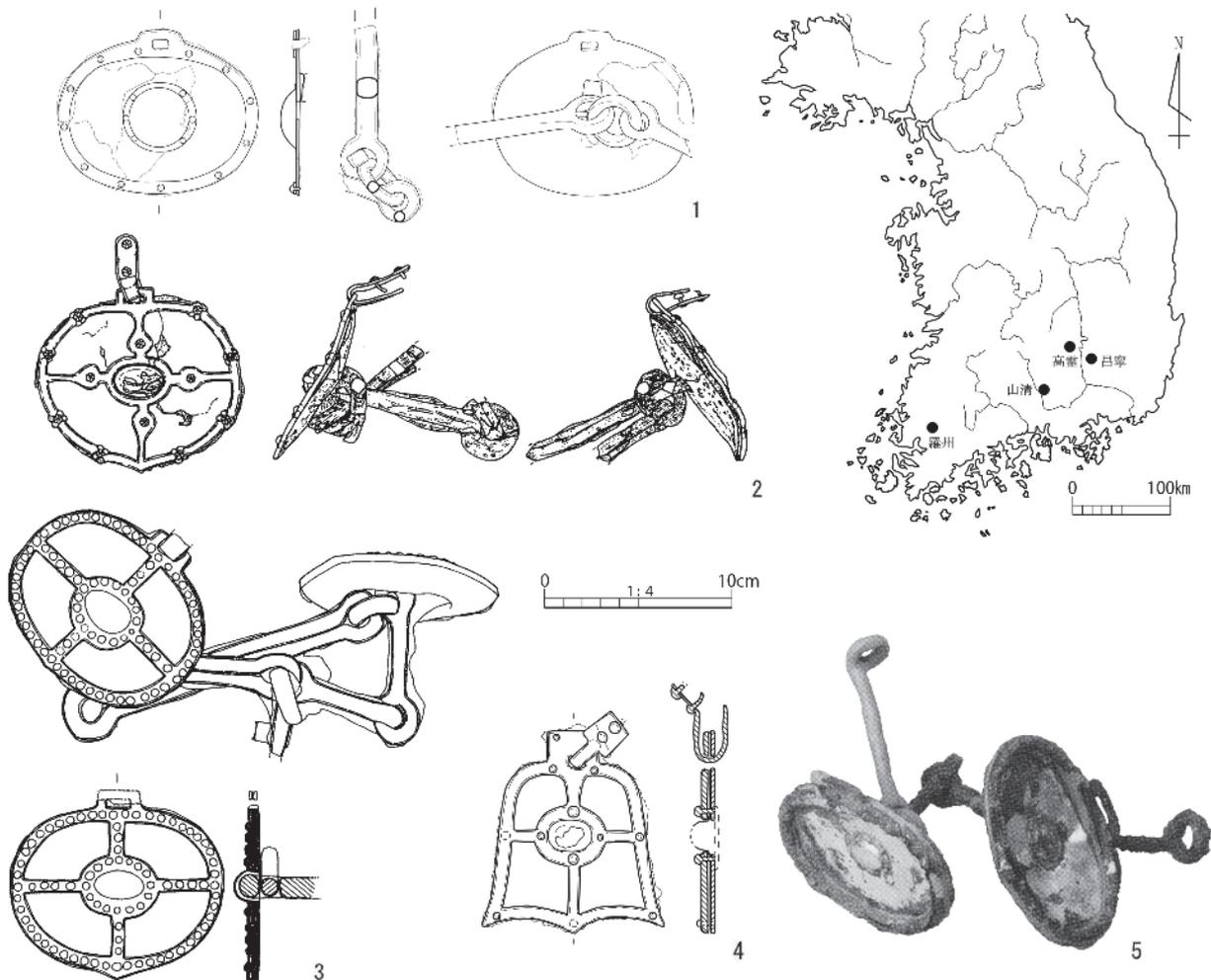


図11 朝鮮半島の覆金具をもつ鏡板轡(S = 1/4, 4・5は縮尺不同)

1: 高靈 池山洞 518号墳 2: 伝高靈 池山洞 3: 羅州 伏岩里 3号墳 4: 伝山清 丹城邑 5: 昌寧 校洞 I 群 11号墳

2-39) は類例のない特異なものだが、壺部が革製とみられることに大加耶の壺鏡との接点を見出しうる [高田 2014: 113]。

以上を総合すると伏岩里 3号墳出土馬具は、大加耶から一括してもたらされた可能性が現状では最も高い。なお、96年石室は九州系の横穴式石室と構造が類似し、TK47 型式期や MT15 型式期の須恵器<sup>(7)</sup>も副葬されるなど、倭との関わりが強くみられる。馬具についても新羅や加耶だけでなく倭との共通性も指摘されてきたが [金洛中 2001・2010]、同時期 (内山敏行 [1996] 編年後期 1 段階) の日本列島にはまだ覆金具をもつ鏡板轡が存在せず、倭からもたらされた可能性についてはまず排除していいだろう。

**新徳古墳出土馬具** 咸平新徳古墳 (新徳 1号墳) は墳長 51m の前方後円墳で、馬具 (鑣轡、木心鉄板装壺鏡、鉄地銀張鉢状雲珠・辻金具など) は他の副葬品と共に、後円部に設けられた横穴式石室の玄室および羨道から出土した [成洛俊 1996]。正式報告書が刊行されておらず、詳細な検討は難しいが、『特別展 百濟』 [国立中央博物館 1999] に掲載された写真や金洛中 [2010] によって紹

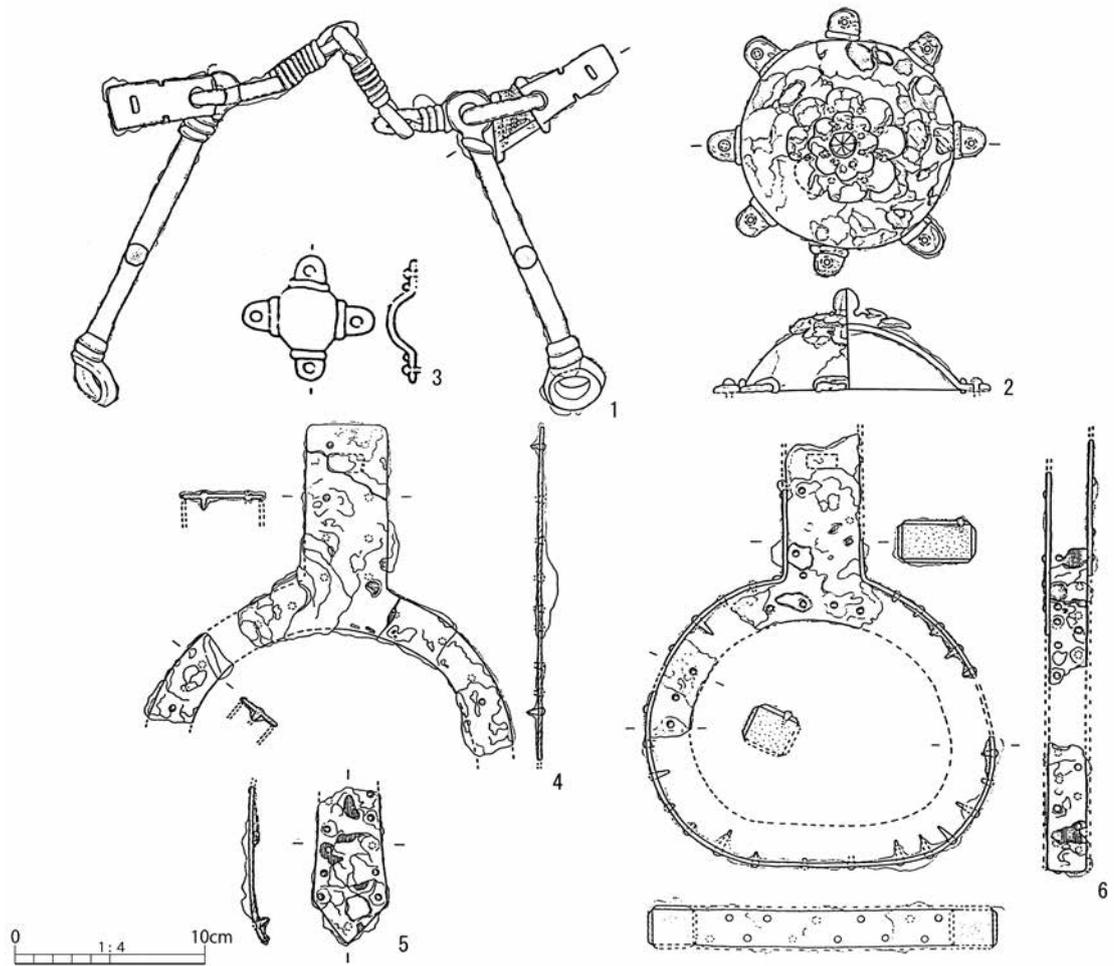


図 12 咸平 新徳古墳出土馬具 (S = 1/4)

介された図面を通じて、その概要を知ることができる。中でも最も華麗な装飾の施された鉄地銀張鉢状雲珠 (図 12-2) については、公州武寧王陵出土銅托銀蓋などの文様の共通性から百済で製作されたとみる意見が有力である [柳昌煥 2004, 金洛中 2010]。鑣轡 (図 12-1) も、全周巻き技法の 3 連式銜に部分巻き技法の 1 條線引手を直接連結する特異なものだが、立聞用金具は百済Ⅲ段階に盛行する板状掛留式 [張允禎 2003] を採用している。近年その存在が明らかとなった壺鐙 (図 12-4~6) は、金洛中によれば壺部が木製とのことであり、百済Ⅲ段階の公州水村里 3 号墳出土例 (図 2-28) との共通性が指摘されている [金洛中 2010 : 121]。

新徳古墳については前方後円墳であること、横穴式石室の構造が九州系の横穴式石室と類似することに加えて、副葬品の中に日本列島の古墳副葬品と共通するものが存在し、振り環頭大刀など一部の副葬品は倭からもたらされたとみられるが、馬具については倭で製作されたとみることは難しい。熊津期における百済中枢の馬具様相は依然不透明ではあるものの、現状では百済中枢で一括して製作されたとみるのが妥当であろう。

**造山古墳出土馬具** 海南月松里造山古墳は直径 17m の円墳で、馬具 (鉄地金銅張 f 字形鏡板轡、

鉄地金銅張劍菱形杏葉3点、鉄製輪鐙1対、無文の小型鑄銅鈴4点)は他の副葬品と共に横穴式石室内から出土した〔国立光州博物館ほか1984〕。百済では唯一、f字形鏡板轡(図2-42)と劍菱形杏葉(図2-44)が相伴しているが、いずれも形態が特異で製作地を絞り込むことが難しい。これらの系譜を考える上で参考になるのは、一緒に出土した鉄製輪鐙(図2-45)と小型鑄銅鈴(図2-43)である。鉄製輪鐙は柳昌煥IB式に該当するが、その中でも造山古墳出土例のようにスパイクをもつものは大加耶Ⅲ段階(5世紀後葉～末)の陝川玉田M3号墳を嚆矢とする〔柳昌煥2007〕。胸繫を裝飾する馬鈴とみられる小型鑄銅鈴も、大加耶周辺で盛行した胸繫裝飾とみられ、大加耶Ⅱ段階(5世紀前葉～中葉)の高霊池山洞32号墳からよく似た無文の小型鑄銅鈴が出土している。

ところでこれらの類例は大加耶だけでなく、6世紀を前後する時期に大加耶などからの技術移転によって本格的に裝飾馬具生産を開始する倭にも認められる。f字形鏡板轡と劍菱形杏葉が徐々に大型化していく方向性は、大加耶よりもむしろ倭において顕著であり、横穴式石室の構造が九州系の横穴式石室と類似すること、副葬品の中にゴホウラ釧〔木下2001〕や倭製鏡(珠文鏡)〔上野2004〕が含まれることを考慮すれば、形態に埋めがたい差異はあるものの、倭との関わりを想定することも十分可能であろう。以上から造山古墳出土馬具については、製作地を一つに絞り込むことは難しいものの、大加耶や倭との関わりを想定しておきたい。

**小 結** このように栄山江流域の裝飾馬具セットには、百済中樞で製作されたとみられるものの他に、大加耶など百済以外で製作されたとみられるものが存在する。同一馬装を構成する各種馬具の系譜の一致は、製作から副葬に至るまでそれらがセットを維持していたことを意味する。百済中樞だけでなく大加耶からも裝飾馬具がもたらされた経緯が問題となるが、同時期の大加耶では中央と地方で馬装に明確な格差が存在し、蟾津江流域からは金銅装の裝飾馬具がまだ出土していないことをふまれば、<sup>(8)</sup>蟾津江流域の地方勢力などを介した間接的な流入は考えにくい。理由は何にせよ大加耶中樞から、蟾津江流域よりも上位の裝飾馬具セットが、栄山江流域に直接もたらされたとみべきだろう。馬具が墓制や他の副葬品の系譜と一致しない点については、金洛中によって既に指摘されているところであり、「各地域集団が勢力伸長の背景を多様なところに求めた状況が反映されている〔金洛中2009:328〕」ものとみられる。栄山江流域における馬匹生産は、少なくとも馬具をみる限り、百済中樞との一元的な関係のもとに始まったわけではなさそうである。

## ②……………栄山江流域における馬匹生産の受容と展開

ここまで栄山江流域から出土した馬具について整理をおこなった。その結果は次の2点に要約することができる。一点目は、栄山江流域における馬具の出現時期は百済Ⅳ段階、すなわち5世紀後葉以降であり、周辺地域に比して著しく遅いこと、そして二点目は、馬具の系譜が多様であり、栄山江流域における主体的な製作を想定できないこと、である。ここからはウマ遺存体なども含めて検討をおこない、栄山江流域における馬匹生産の受容と展開について整理をおこなう。

### 1. 栄山江流域における馬の出現時期

そもそも栄山江流域にはいつから馬がいたのであろうか。確実に馬の存在を議論することので

きる馬歯や馬骨などのウマ遺存体をみると、泗川芳芝里貝塚の円形粘土帶土器層出土例や加平大成里遺跡49号竖穴出土例<sup>(9)</sup>から、その多寡はさておき、朝鮮半島南部でも初期鉄器時代には馬が飼育されていたとみられる[李俊貞2013a]。続く原三国時代に入ると南東部、すなわち弁辰韓の地域では轡を中心とする馬具も出現し、乗用に用いられる馬が確実に存在したことがわかる。

これに対し栄山江流域を中心とする南西部では、光州新昌洞遺跡から朝鮮半島南部で唯一の黒漆塗り木製馬車部材<sup>(10)</sup>が出土しているものの(図13)、この時期にまで遡るウマ遺存体は確認されていない。新昌洞遺跡や、紀元前1世紀初～紀元後3世紀に形成されたとみられている海南郡谷里貝塚において、イヌやウシなど家畜とみられる動物遺存体が出土しているにもかかわらず、ウマ遺存体が出土していないことをふまえれば[渡邊1989, 金建洙ほか2002]、原三国時代の栄山江流域を中心とする南西部では、牛は飼育されていたものの、馬は基本的に飼育されていなかったとみてよいだろう。

このような考古資料の実態は、『三国志』魏書東夷伝弁辰条にみえる「乗駕牛馬」はもちろんのこと、馬韓条にみえる「不知乘牛馬 牛馬盡於送死」とも齟齬をきたしている。今後、栄山江流域を中心とする南西部で、原三国時代に遡るウマ遺存体が発見される可能性は否定しないが、朝鮮半島中西部から南西部には確かな原三国時代馬具が存在しないことに加えて<sup>(11)</sup>、南東部で出現し、紀元後2～4世紀には中西部でも流行する馬形帶鉤が南西部にまでは広がらないことをふ

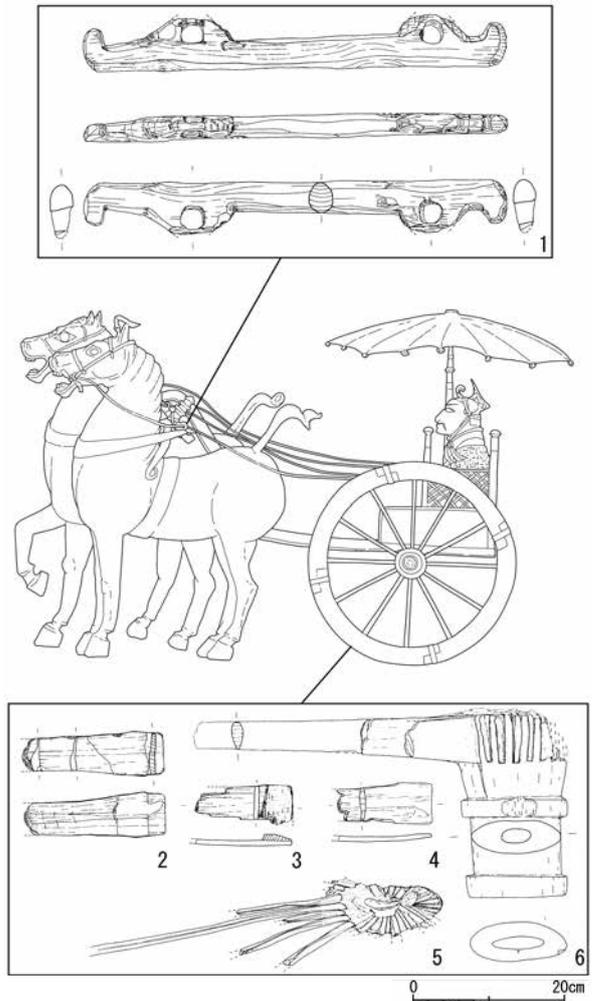


図13 光州 新昌洞遺跡出土馬車部材 (S = 1/10)

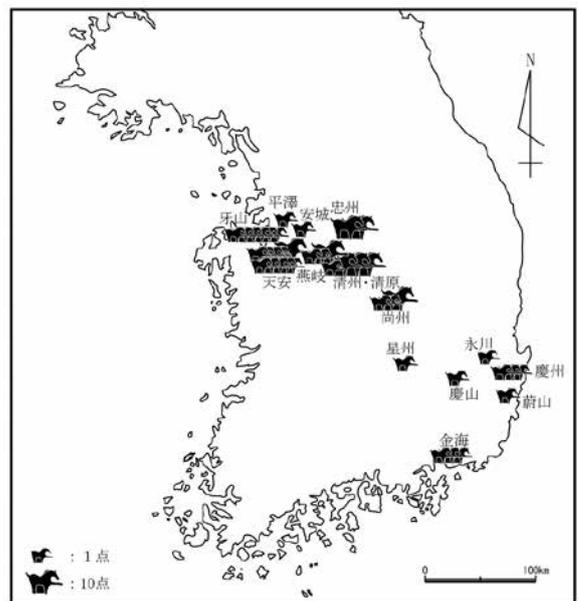


図14 馬形帶鉤の分布

まえば(図14)[朴章鎬2012],少なくとも馬に関する限り,馬韓条の記述は中西部の実態を捉えたものである可能性が高いと言えよう。

## 2. ウマ遺存体からみた栄山江流域における馬匹生産のはじまり

結論を先に言えばウマ遺存体からみても,栄山江流域における馬の本格的な普及は漢城期にまでは遡らず,熊津期以降,すなわち5世紀後葉以降と考えざるをえない。以下,ウマ遺存体の出土状況を具体的にみてみよう。

**仙岩洞2号墳** 光州仙岩洞2号墳は直径10mの円墳である。墳丘や埋葬施設は完全に削平されてしまっていたが,周溝西側から木材と共に馬歯<sup>(12)</sup>が出土している[湖南文化財研究院2012]。報告者は墳丘形態や周溝出土土器から,6世紀を前後する時期に築造されたとみている。土器は徐賢珠[2006]編年のⅢ-2~3期(5世紀末~6世紀前葉)に位置づけられよう。

**伏岩里1号墳** 伏岩里1号墳は直径17m,高さ4.3mの円墳である。周溝の東区から土器類と共に馬歯<sup>(13)</sup>が出土している[全南大学校博物館1999]。土器の中にはMT15型式期の須恵器も含まれている。墳丘完成後に設けられた横穴式石室は伏岩里編年Ⅱb期(6世紀第3四半期)[金洛中2009],羨道出土土器は徐賢珠編年のⅣ-2期(6世紀後葉)に位置づけられているが,周溝の東区から馬歯と共に出土した土器は,徐賢珠編年のⅢ-3期(6世紀前葉)に位置づけられ,石室よりも古い。報告者は横穴式石室以前の埋葬施設の存在を想定し,周溝出土遺物はそれに伴うものとみている。

**伏岩里2号墳** 伏岩里2号墳は長軸20.5m,短軸14.2m,高さ4.0~4.5mの方台形墳である。周溝形態などから報告者は当初,梯形墳であったのが方台形墳へと改変されたとみている[全南大学校博物館1999]。埋葬施設の調査はおこなわれていない。北側の周溝から大量の土器類や円筒形土器製品と共に,1個体分のウマ遺存体と,ウシ遺存体,イヌの下顎骨が出土した。馬と牛は出土状態から,足を縛って折り曲げられた状態であったと推測されている(図15)。この他にも周溝内からは馬歯と推定される動物の歯が相当数出土したとのことである。北側の周溝から出土した土器は

TK47型式の須恵器を含み,徐賢珠編年のⅢ-2期(5世紀末~6世紀初)に位置づけられている。なおこれらの動物遺存体や土器など大部分の遺物は,円筒形土器(墳周土器)片が一定間隔で出土した周溝堆積層下層(灰黄色粘土層)ではなく,上層(灰黒色粘土層)から出土している。報告者は,円筒形土器は梯形墳に伴うもの,動物遺存体や土器は方台形墳に伴うものとみている。

**伏岩里3号墳1号石室** 伏岩里3号墳1号石室は墳頂平坦部に位

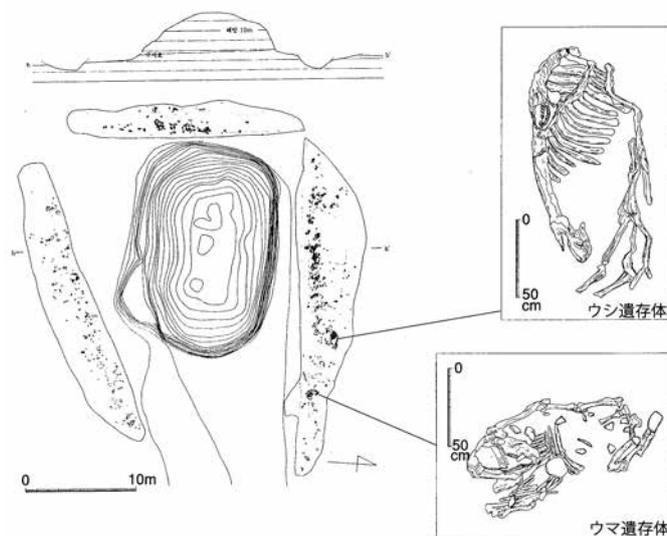


図15 羅州 伏岩里2号墳周溝出土動物遺存体

表2 百濟古墳出土動物遺存体一覧

地域	遺跡名	出土位置	出土動物遺存体	出典
河南	廣岩洞2号石室墳	石室内	ウシ	世宗大学校博物館 2006
群山	山月里2号墳	石室内	ウマ	群山大学校博物館 2004
群山	山月里3号墳	石室内	ウマ	群山大学校博物館 2004
光州	仙岩洞2号墳	周溝	ウマ(ウシ[金建洙 2016])	湖南文化財研究院 2012
羅州	伏岩里1号墳	周溝	ウマ(ウシ[金建洙 2016])	全南大学校博物館 1999
羅州	伏岩里2号墳	周溝	ウマ, ウシ, イヌ	全南大学校博物館 1999
羅州	伏岩里3号墳1号石室	石室内	ウマ(ウシ?[金建洙 2016])	国立文化財研究所 2001
務安	高節里古墳	墳丘内	ウマ	木浦大学校博物館 2002
光州	良瓜洞杏林墓石墳	石室内	ウシ	大韓文化財研究院 2013
咸平	馬山里1号墳	石室内	ウシ	金建洙 2016
靈巖	チャラボン古墳	石室内	ウシ, プタ	大韓文化財研究院 2015
新安	新依島上西4号墳	石室内	ウシ	馬韓文化財研究院 2015

置し、96年石室に後続して構築された横口式石室<sup>(14)</sup>である。伏岩里編年Ib期(6世紀第1四半期)に位置づけられている[金洛中 2009]。歯や下腿骨などのウマ遺存体は石室中央を1.2mほど掘り下げたところから出土しているが、床面直上からの出土ではなく、後世の混入の可能性も排除できないようである[国立文化財研究所 2001: 201]。遺存状態からみて1個体分の馬が埋葬されたと判断されており、歯からみて成熟した(老いた)牡馬とみられるとのことである[国立文化財研究所 2001: 209]。

**高節里古墳** 務安高節里古墳は一辺38m、高さ3.8mの方台形墳である。埋葬施設は確認されていないが、墳頂から2.7m下の封土内(南東トレンチ11層)から馬と推定される動物の下顎骨が出土しており、この層を盛土する際に何らかの祭祀がおこなわれたと推定されている。墳丘は旧地表面付近を整地した際の土に由来するとみられる下層と、周溝由来の土からなる上層に大別され、11層は下層に該当する。埋葬施設は確認されていないが、報告者は周溝などから出土した土器から古墳の築造時期を6世紀前半とみており、装飾器台から百濟と関連の深い勢力であったと推定している[木浦大学校博物館 2002]。周溝から出土した土器は、徐賢珠編年のⅢ-2期に位置づけられている。

これらの他にも墳長30mの前方後円墳である靈巖チャラボン古墳の石室内から、下顎骨、上顎骨、大腿骨、歯などを含む1頭分の馬骨が出土たとされていたが[姜仁求 1992]、再同定の結果、ウマではなく少なくとも4個体分のウシ遺存体で、少量のプタ(?)遺存体も含まれることが明らかとなっている[金建洙 2015]。

**小 結** 栄山江流域における三国時代のウマ遺存体の出土事例は以上のたった5例、それも現状では伏岩里古墳群に集中している状況にある。また専門家による同定結果が報告書に記載されておらず、金建洙が指摘するようにこれらの中にウシ遺存体が含まれている可能性は排除できない。新昌洞遺跡や郡谷里貝塚のウシ遺存体から、栄山江流域における牛飼育は原三国時代にまで遡るとみられ、少なくとも熊津期においては馬よりも牛の方が一般的な家畜であったことは確かであろう。いずれにせよ栄山江流域における馬の本格的な飼育は、熊津期以降のことと考えざるをえない。

ここで注意したいのは、馬にせよ牛にせよ古墳からの出土であり、基本的に葬送儀礼に伴う犠牲とみられる点である。このような葬送儀礼に伴って馬や牛を犠牲にする風習は、新羅や加耶には広く認められるものの〔兪炳一2002, 李俊貞2013aなど〕, 百済では榮山江流域を除くと、漢江流域の河南廣岩洞2号墳（ウシ遺存体）や、錦江流域の群山山月里2号墳, 3号墳（いずれもウマ遺存体）で確認されているに過ぎない〔李俊貞2013b, 金建洙2016〕（表2）。百済でも集落など生活遺跡からは出土しているが、葬送儀礼における牛馬の犠牲は、新羅や加耶に比べて盛行しなかったとすることができそうである。

この事実は、榮山江流域における馬匹生産のはじまりを考える上で、馬具の系譜以上に示唆するところが大きい。もちろん榮山江流域における馬匹生産のはじまりは、巨視的にみれば漢城陥落、熊津遷都を前後する時期に起きた百済中枢と榮山江流域社会の関係変化に規定されるものであっただろうが、実際に受容するにあたっては、東方、すなわち加耶の諸地域（諸集団）との関係も無視できないものであったことを意味するからである。筆者は馬具副葬を開始した熊津期の榮山江流域社会について、在地系墓制を採用する集団であれ、外来系墓制を採用する集団であれ、百済中枢をはじめとする様々な地域（政治勢力）と関係をもつことによって被葬者個人や古墳築造集団の威信が維持される「開放的な社会」であったとみている〔諫早2016a〕。伏岩里古墳群を中心にみられる馬を用いた葬送儀礼や、伏岩里3号墳96年石室から出土した大加耶に系譜を求められる装飾馬具の存在は、伏岩里古墳群築造集団、ひいては榮山江流域社会が、馬匹生産という新たな生業を、百済中枢との一元的な関係の中で受け入れたわけではなかったことを、雄弁に物語っている。

### 3. 榮山江流域における馬匹生産の展開

朝鮮半島では榮山江流域以外の地域も含め、発掘調査によって組織的な馬匹生産の場である「牧」が特定されたことはまだない。<sup>(16)</sup> また統一新羅時代以前は馬匹生産と関わる文献史料も乏しく、日本列島古墳時代のように後世に確実に存在した牧比定地を起点とするアプローチも難しい。<sup>(17)</sup> そのような中で三国時代の榮山江流域が一大馬匹生産地であり、さらには5世紀を前後して始まったとみられる日本列島の馬匹生産にも大きな影響を与えたであろうという朴天秀の仮説が、日本人研究者だけでなく韓国人研究者にもさほど違和感なく受容されてきた背景には、高麗時代以降、榮山江流域の南方に位置する済州島が朝鮮半島最大の馬匹生産地となることに加えて、統一新羅時代に南西海岸島嶼部において馬匹生産が盛行していたことを示す『入唐求法巡礼行記』や『新唐書』新羅伝の記載によるところが大きい。<sup>(18)</sup> これらを通じて、統一新羅時代の真骨貴族が南西海岸島嶼部に放牧地を所有し、馬匹生産をおこなっていたことが、当時、国際的に広く認識されていたことを知ることができる〔李成市1997:66〕。

南西海岸島嶼部で生まれた馬が、都のある慶州にまでどのように運ばれたのかを知る手がかりはないが、朝鮮時代の済州島産馬の貢上ルート<sup>(19)</sup>を参考にすれば〔南都泳2001〕, 必要最低限の海路を除けば基本的に陸路であったとみられる。すなわち海によって四周を囲まれ、馬匹の生産・管理に適した島嶼部における馬匹生産は、それが大規模であればあるほど、消費地である対岸と連動して展開していたと考えるべきであり、南西海岸島嶼部における馬匹生産の盛行は、対岸に位置する榮山江流域にも、少なくとも統一新羅時代には大規模な馬匹集積地、つまり牧が存在したことを必然

的に意味する。

問題は、南西海岸島嶼部が馬匹生産地として開発された時期がいつか、である。その下限は今みたとように統一新羅時代に、上限はひとまず対岸の栄山江流域において馬匹生産が始まった熊津期に求めることができる。まだ南西海岸島嶼部における馬匹生産の存在を示す考古資料は皆無であるが、南都泳が推測するように南西海岸の島嶼部が三国統一後に新羅によって馬匹生産地として新たに開発されたと考えるよりは、百済によって既に開発されていた馬匹生産地が、統一新羅時代に入っても引き続き利用されたとみるのが自然である〔南都泳 1996:107〕。475年の漢城陥落、熊津遷都によって国土の北半を失った百済にとって、新たな馬匹生産地の確保が喫緊の課題であったことは想像に難くなく、そのような中で、ある時点で百済領域化した南西海岸島嶼部が新たな馬匹生産地として浮上したのではなかろうか。南西海岸島嶼部の百済領域化と馬匹生産の開始に有機的な関係が想定できるのであれば、その時期は陵山里型石室を埋葬施設とする新安長山島道昌里古墳や、泗泚期を中心とする群集墳で、ウシ遺存体も出土している新安新依島上西古墳群の存在から、泗泚期のどこかに求めておくのが妥当であろう。

『日本書紀』継体紀や欽明紀には、倭が百済へ馬を送ったという記事が集中してみられる。個々の記事の信憑性はひとまずおくとしても、熊津期から泗泚期開始直後までの間は、百済領域内において必要な馬匹を確保することが困難であった可能性が高い〔諫早 2012b〕。以後、百済滅亡までそのような記事は一切みえなくなるが、それは泗泚期に入り、南西海岸島嶼部など百済領域内における馬匹生産が軌道に乗ったことを意味しているのではないだろうか。

このように統一新羅時代に南西海岸島嶼部で盛行した馬匹生産は、百済熊津期に始まった栄山江流域における馬匹生産の延長線上で理解することが可能であり、さらには高麗時代以降の済州島における大規模馬匹生産の前史となった可能性が高い。であるとしても、後代の、それも隣接地域の状況が無批判に遡らせて三国時代の栄山江流域における馬匹生産を評価するのは適切でない。栄山江流域に限らず三国時代の馬匹生産についてはまだほとんど何もわかっていないが、あくまで同時代資料にもとづいて議論していく必要があることを強調しておきたい。

## おわりに

ここまで馬具とウマ遺存体の出土事例を集成し、栄山江流域における馬匹生産の受容と展開について整理をおこなった。結果として、栄山江流域における馬匹生産の開始時期は5世紀後葉、すなわち百済熊津期を大きく遡らないことが明らかとなった。これは日本列島において、初期馬具を中心とする馬関連考古資料の系譜、出現時期が、栄山江流域系（産）土器の出現時期と一致しない事実と共に、日本列島に馬匹生産をもたらした馬飼集団の故地が、栄山江流域以外の地に求められることを意味する。また漢城陥落、熊津遷都を前後する頃、栄山江流域社会に大きな変化が現れることは、既に様々な考古資料をもとに議論されており、馬匹生産もその一つとして理解することは可能である。ただし馬匹生産の受容に関しては、百済中枢との一元的な関係では理解できず、加耶の諸地域（諸集団）との関係も無視できないことを指摘した。馬具、ウマ遺存体ともに資料数が少ない中での議論には限界があるが、最終的に百済領域に編入されるという「結果」に惑わされること

なく、栄山江流域社会の視点に立ってその「過程」を見つめなおす必要性を強く感じる。それを考える足がかりとなる考古資料は、もう十分に蓄積されている。

とは言うものの、5世紀後葉にはじまる栄山江流域の馬匹生産の実態や規模を知る手がかりは、今のところまったくない。ただ、肥沃な沖積平野が広がり、現在も韓国の一大穀倉地である栄山江流域において、既存の生活基盤である農業生産と競合する馬匹生産を大規模に展開するメリットが、栄山江流域社会にとって、あるいは百済中枢にとって、果たしてどれほどあったのかを想像すれば、答えは自ずと出てくるだろう。

なお葺石をもつ一辺51m、高さ9mの方台形墳である咸平金山里古墳から、馬形埴輪を含む埴輪片が出土している。埋葬施設の調査はまだおこなわれていないが、報告者は中国陶磁や形象埴輪から古墳の築造時期について、5世紀後半～6世紀前半とみる[全南文化財研究所2015]。馬形埴輪は破片であるが、鞍や尻繫の表現をもつ飾馬である。栄山江流域社会が馬匹生産を受容するにあたって、一足先に馬匹生産が定着していた日本列島の諸地域とどのような関係があったのか、ほぼ同時期に生駒山西麓など日本列島の馬匹生産地周辺で出土する栄山江流域系(産)土器の評価と合わせて、今後の課題としておきたい。

[謝辞] 本稿をなすにあたり、高田貫太氏、李暎澈氏をはじめとする本共同研究メンバーには大変有益なご教示をいただきました。また資料の調査・収集にあたっては下記の方々には大変お世話になりました。末筆ではありますがここにご芳名を記し、感謝の意を表します。なお本稿にはJSPS科研費16K03173、18K01083の成果を一部含む。

白井克也、廣瀬覚、権五栄、金大煥、呉東埜、李東熙、李秀鎮、李漢祥、林智娜、張允禎、鄭仁邵、東京国立博物館、国立羅州文化財研究所、大韓文化財研究院、順天大学校博物館

## 註

(1)——日本列島から出土する栄山江流域系(産)土器の理解については、研究者ごとに少なからず差異があり、その系譜を一律に栄山江流域に求めることはできないという意見もある[権五栄2013など]。また都屋北遺跡においては、栄山江流域系(産)土器の出現に先行して、集落の形成や馬匹生産が始まっているという指摘もある[金大煥2012]。

(2)——報告者はMT15型式期の須恵器と共伴する福岡県小正西古墳出土例との鏡板形態の類似に注目しているが[盧亨信2017]、鏡板の全長は15cmと小さく、田中由理の鉄地金銅張f字形鏡板分類に照らせば、初期型式の一つであるIB式の範疇に収まるものとみられる[田中由2004]。鉄製f字形鏡板を2段階に編年した中條英樹はその製作期間についてI段階をTK208型式期、II段階をTK23～47型式期とみた[中條2003]。短小な尾部をもつ本例はI段階の福泉洞23号墳出土例とII段

階の小正西古墳出土例の間に位置づけられよう。

(3)——木心輪鐙の樹種については、これまで中国東北部の馮素弗墓と日本列島の大坂府七観古墳、岐阜県中八幡古墳でクワ属の利用が確認され、両者の関係性について注意してきたところである[諫早2014]。今回初めて朝鮮半島の木心輪鐙にクワ材の利用が確かめられたことにより、木心輪鐙へのクワ材利用が中国(東北部)に淵源をもち、朝鮮半島を経て日本列島に伝わった可能性が一層高まったといえよう。

(4)——ただし「飯綱社型鉄製輪鐙」は、一枚の長方形鉄板の中心に鑿などで切り込みを入れた後、二股にわかれた鉄板の厚みを調整し、最後に両端を重ねて鍛接して輪部を整形したとみられ、鉄棒を8字形に曲げて下端を鍛接する丁村古墳出土例とは原材料の形状や製作技法が大きく異なる。

(5)——丁村古墳1号石室の玄室内には3基の木棺が確

認されており、閉塞部の調査結果からみて追葬があったことは確実である。報告者は断定を避けつつも1号木棺→2号木棺→3号木棺の順に安置した可能性が高いとみている。

(6)——月松里型、栄山江式、栄山江型、栄山江類型など様々な呼称があるが、いずれにせよ北部九州型や肥後型などの九州系横穴式石室と構造が類似するとみる点では一致する〔柳沢 2001, 金洛中 2009 など〕。

(7)——栄山江流域出土須恵器の評価については、〔酒井 2013〕を参考にした。

(8)——蟾津江流域では南原西谷里・斗洛里 32 号墳〔全北大学校博物館 2015〕や順天雲坪里 M5 号墳から装飾馬具セットが出土しているが、いずれも銀装であり、今のところ金銅装は出土していない。

(9)——直径 2.2～2.5m、深さ 0.5m の不整形の堅穴から、花盆形土器や鑄造鉄斧などと共に 4～5 歳と推定される馬歯が 1 個体分出土しており〔黒澤 2009〕、馬歯に対する放射性炭素年代測定の結果、 $2,070 \pm 20\text{yrBP}$  (2 $\sigma$  暦年代範囲 170BC～40BC) という年代が得られている〔小林ほか 2009〕。

(10)——趙現鐘〔2014〕は非漢式車馬具を伴う「古朝鮮式馬車」を 1 輦 2 頭式の A 式と 2 輦 1 頭式の B 式に細分した上で、新昌洞例が B 式であることを指摘し、朝鮮半島北部の咸鏡南道金野郡(旧永興郡)所羅里土城例から、B 式の下限年代を紀元前 75 年のいわゆる大楽浪郡の成立に求めた。

(11)——朝鮮半島中西部各地の原三国時代～三国時代初めの墳墓から出土する「両端環棒状鉄器」を馬や牛を曳くための狭棒面繫(オモゲー、拍子木とも呼ばれる)とみる見解が最近提示され〔李柱憲 2015〕、注目されるが、確実に騎乗に用いられたことを示す轡については、中西部の金浦雲陽洞 12 号墳丘墓などで出土している複数の振り金具からなる「異形鉄器」にその可能性が指摘されている程度である〔権度希 2013〕。中西部における確実な馬具は、現状では 3 世紀後半の忠州金陵洞 78 号墓出土鉄製鑣轡を嚆矢とする〔諫早 2012a〕。

(12)——報告者と異なり金建洙〔2016〕は牛歯とみるが、どちらも同定の根拠は示されていない。

(13)——報告者と異なり金建洙〔2016〕は牛歯とみるが、どちらも同定の根拠は示されていない。

(14)——呉東堉〔2017〕は百濟系の横穴式石室とみる。

(15)——金建洙〔2016〕はウシ遺存体の可能性もあるとする。

(16)——華城松山洞農耕遺蹟では漢城期前半(3 世紀後葉～4 世紀初)の水田遺構の上面で人や牛馬の足跡が多数検出されており〔韓神大学校博物館 2009〕、権五榮は牛馬耕や駄載に加えて放牧の可能性を指摘している〔権五榮 2012〕

(17)——日本列島古墳時代の馬匹生産については、〔諫早 2017〕を参照。

(18)——『入唐求法巡礼行記』(846 年 9 月 6 日)には「卯の時、武州の南界の黄茅嶋の泥浦に至りて船を泊す。亦た丘草嶋とも名づく。四、五人の山上に在る有り。人を差わして之を取らえんとす。其の人走り蔵れて、取えんとするも処をえず。是れ新羅国の第三宰相が馬を放つ処なり。高移嶋より丘草嶋に至るまで、山嶋い相連なる。東南に向かいて遙かに耽羅嶋を見る。』、『新唐書』新羅伝には「宰相家祿絶えず、奴僮三千人、甲兵は牛・馬・猪もて之を称す、海中の山に牧畜す。」とある〔李成市 1997: 66〕。

(19)——文献史料によれば済州島北部の朝天浦などに集積された貢馬は、貢馬船に載せられて、まず対岸の康津、海南、靈岩などに上陸し、羅州などを經由して陸路で都へと送られたようであり〔南都泳 2001: 555〕、貢馬以外の馬の輸送ルートも海路区間に関しては大きく異ならなかったものとみられる。

(20)——李相勳〔2018〕は、『三国史記』卷四十三・列伝第三・金庾信 下にみえる、金庾信の孫である允中が聖徳王(在位 702～737 年)から祖先の功績を讃えられて「絶影山(釜山影島か)の馬一匹を賜ったという記事から、統一新羅時代には南東海岸の島嶼部でも馬匹生産がおこなわれていたとみる。

## 参考文献

(日本語〔五十音順〕)

諫早直人 2008 「古代東北アジアにおける馬具の製作年代—三燕・高句麗・新羅—」『史林』第 91 卷第 4 号 史学研究会

諫早直人 2010a 「東アジアにおける鉄製輪鑿の出現」『比較考古学の新天地』同成社

諫早直人 2012a 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣

諫早直人 2012b 「馬匹生産の開始と交通網の再編」『古墳時代の考古学』7 同成社

- 
- 諫早直人 2013「馬具の舶載と模倣」『技術と交流の考古学』同成社
- 諫早直人 2014「馬具の有機質」『七観古墳の研究』京都大学大学院文学研究科
- 諫早直人 2016a「韓・倭の馬具—栄山江流域出土馬具を中心に—」『古代日韓相互交渉の動態 予稿集』国立歴史民俗博物館
- 諫早直人 2016b「馬匹・馬具生産」『季刊考古学』第137号 雄山閣
- 諫早直人 2017「日本列島における馬匹生産のはじまり」『古代武器研究』Vol.13 古代武器研究会・山口大学考古学研究室
- 上野祥史 2004「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館
- 内山敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 大阪府教育委員会 2010『葦屋北遺跡Ⅰ』
- 大阪府教育委員会 2012『葦屋北遺跡Ⅱ』
- 大阪府立狭山池博物館 2016『河内の開発と渡来人』
- 岡内三眞 1979「朝鮮古代の馬車」『震檀学報』第46・47合併号 震檀学会
- 木下尚子 2001「古代朝鮮・琉球交流試論—朝鮮半島における紀元一世紀から七世紀の大型巻貝使用製品の考古学的検討」『青丘学術論集』第18集 韓国文化研究振興財団
- 金洛中（竹谷俊夫訳）2001「五～六世紀の栄山江流域における古墳の性格—羅州新村里九号墳・伏岩里三号墳を中心に—」『朝鮮学報』第179輯 朝鮮学会
- 権五栄（坂靖訳）2013「住居構造と炊事文化からみた百済系移民の畿内地域への定着とその意味」『古代学研究』第197号 古代学研究会
- 酒井清治 2013『土器から見た古墳時代の日韓交流』同成社
- 神 啓崇 2016「西都原古墳群出土心葉形十字文鏡板付轡・心葉形三葉文杏葉の再検討」『七隈史学』第18号 七隈史学会
- 成洛俊（太田博之訳）1996「咸平禮德里新徳古墳緊急収拾調査略報」『韓国の前方後円形墳 早稲田大学韓国考古学術調査研修報告』雄山閣
- 高田貫太 2014「古墳時代の日朝関係—新羅・百済・大加耶と倭の交渉史—」吉川弘文館
- 滝沢 誠 1992「複環式鏡板付轡の検討」『史跡 森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』更埴市教育委員会
- 田中清美 2005「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版
- 田中由理 2004「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第51巻第2号 考古学研究会
- 千賀 久 1994「日本出土初期馬具の系譜2 — 5世紀後半の馬装具を中心に—」『橿原考古学研究所論集』第12号 吉川弘文館
- 千賀 久 2004「日本出土の「非新羅系」馬装具の系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館
- 中條英樹 2003「鉄製f字形鏡板付轡の編年とその性格」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第10集 帝京大学山梨文化財研究所
- 張允禎 2003「韓半島三国時代の轡の地域色—とくに立間用金具を中心として—」『考古学研究』第50巻第2号 考古学研究会
- 土田純子 2017『東アジアと百済土器』同成社
- 野島 稔 1984「河内の馬飼」『万葉の考古学』筑摩書房
- 朴天秀 2005「日本列島における6世紀代の栄山江流域産の土器が提起する諸問題」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室
- 藤田道子 2011「葦屋北遺跡の渡来人と牧」『ヒストリア』第229号 大阪歴史学会
- 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳』
- 宮崎泰史 2012「家畜と牧場」『古墳時代の考古学』5 同成社
- 柳沢一男 2001「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』第179輯 朝鮮学会
- 李成市 1997『東アジアの王権と交易 正倉院の宝物が来たもうひとつの道』青木書店
- 李相勲 2018「新羅の馬と牧場（講演録）」『馬が語る古代東アジア世界史』汲古書院
- 李炳鎬 2015『百済寺院の展開と古代日本』塙書房  
(韓国語〔カナダ順〕)
- 諫早直人 2010b「3) M3号墳」『順天 雲坪里 遺蹟Ⅱ』順天大学校博物館
-

- 諫早直人 2011「洛東江下流域 出土 馬具의 地域性과 그 背景」『慶北大学校考古人類学科 30 周年 紀念 考古學論叢』慶北大学校出版部
- 姜仁求 1992『자라봉古墳』韓國精神文化研究院
- 慶尚大学校博物館 1998『陝川 玉田古墳群Ⅶ』
- 国立加耶文化財研究所 2016『高靈池山洞古墳群 518 号墳 發掘調査報告書』
- 国立光州博物館 2002『光州 新昌洞 低湿地 遺蹟Ⅳ』
- 国立光州博物館・百濟文化開發研究院 1984『海南月松里 造山古墳』
- 国立金海博物館 2014『미사벌의 지배자 그 기억을 더듬다』
- 国立羅州文化財研究所 2017『羅州 伏岩里 丁村古墳』
- 国立文化財研究所 2001『羅州 伏岩里 3 号墳』
- 国立中央博物館 1999『特別展 百濟』
- 群山大学校博物館 2004『群山 山月里 遺蹟』
- 權度希 2006a「百濟馬具의 研究」『崇實史學』第 19 輯 崇實大学校史学会
- 權度希 2006b「百濟 鎧子の 製作方法과 展開 様相」『先史와 古代』24 韓國古代学会
- 權度希 2013「雲陽洞 12 号 墳丘墓 出土 異形 轡에 대하여」『金浦 雲陽洞 遺蹟Ⅰ』漢江文化財研究院
- 權五榮 2012「百濟의 馬 飼育에 대한 새로운 資料」『21 世紀의 韓國考古學Ⅴ』周留城
- 金建洙 2015「靈巖 자라봉古墳 出土 自然遺物」『靈巖 泰澗里 자라봉古墳』大韓文化財研究院
- 金建洙 2016「湖南地方 古墳 出土 動物遺体 考察」『湖南考古學報』52 湖南考古学会
- 金建洙・신상효 2002「新昌洞 低湿地遺蹟 動物遺体 分析」『光州 新昌洞 低湿地 遺蹟Ⅳ』国立光州博物館
- 金洛中 2009『榮山江流域 古墳 研究』学研文化社
- 金洛中 2010「榮山江流域 出土 馬具 研究」『韓國上古史學報』第 69 号 韓國上古史学会
- 金大煥 2012「蔞屋北 遺跡으로 본 韓日 交渉」『人類學・考古學論叢』（嶺南大学校文化人類学科開設 40 周年紀念論叢）学研文化社
- 南都泳 1996『韓國馬政史』韓國馬事會 馬事博物館
- 南都泳 2001『濟州島 牧場史』韓國馬事會 馬事博物館
- 盧亨信 2017「(3) 馬具」『羅州 伏岩里 丁村古墳』国立羅州文化財研究所
- 大韓文化財研究院 2013『光州 良瓜洞 杏林遺蹟』
- 大韓文化財研究院 2015『靈巖 泰澗里 자라봉古墳』
- 大韓文化財研究院 2017『高敞 七岩里古墳』
- 大韓文化財研究院 2019『和順 千德里 懷德 3 号墳』
- 渡邊 誠 1989「郡谷里貝塚（第 1 次）出土 動物遺体略報」『海南郡谷里貝塚Ⅲ』木浦大学校博物館
- 柳昌煥 1995「伽耶古墳 出土 鎧子에 대한 研究」『韓國考古學報』第 33 輯 韓國考古学会
- 柳昌煥 2004「百濟馬具에 대한 基礎的 研究」『百濟研究』第 40 輯 忠南大学校百濟研究所
- 柳昌煥 2007「三国時代 鉄製鎧子에 대한 一考察」『考古學廣場』創刊号 釜山考古學研究会
- 柳昌煥 2018「榮山江流域 出土 馬具의 性格과 意味」『中央考古研究』第 25 号 中央文化財研究院
- 馬韓文化財研究院 2015『新安 上台西里 上西古墳群』
- 木浦大学校博物館 2000『靈光 鶴丁里・咸平 龍山里 遺蹟』
- 木浦大学校博物館 2002『務安 高節里古墳』
- 朴章鎬 2012「韓半島 中南部 出土 動物形帶鉤의 展開와 意味」『嶺南考古學』第 62 号 嶺南考古学会
- 徐賢珠 2006『榮山江 流域 古墳 土器 研究』学研文化社
- 成正鏞・權度希・諫早直人 2007「鼓樂山城과 馬老山城 出土 馬具에 대한 檢討」『湖南考古學報』27 号 湖南考古学会
- 成正鏞・中條英樹・權度希・諫早直人 2006「百濟 馬具 再報（1）—清州 新鳳洞古墳群 出土 馬具—」『先史와 古代』24 韓國古代学会
- 世宗大学校博物館 2006『河南 廣岩洞 遺蹟』
- 小林紘一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・瀨谷 薫・Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・孔智賢・野村敏江 2009「加平 大成里遺蹟의 放射性炭素年代測定（Ⅰ）」『加平 大成里遺蹟』京畿文化財研究院
- 順天大学校博物館 2003『麗水 鼓樂山城Ⅰ』
- 順天大学校博物館 2010『順天 雲坪里 遺蹟Ⅰ』

- 
- 順天大学校博物館 2014『順天 雲坪里 遺蹟Ⅲ』  
嶺南文化財研究院 2013『大邱 時至地区 古墳群Ⅱ (1)』  
영해文化遺産研究院 2016『和順 内坪里 사촌古墳』  
呉東暉 2017「5～6世紀 榮山江流域圈의 動向과 倭系古墳의 意味」『百濟學報』第20号 百濟学会  
俞炳一 2002「新羅・伽耶의 무덤에서 出土한 馬骨의 意味」『科技考古研究』第8号 亜州大学校博物館  
李東熙 2005『全南東部地域 複合社会 形成過程의 考古學的 研究』成均館大学校大学院博士学位論文  
李柱憲 2015「兩端環棒狀鉄器断想」『友情의 考古學』진인진  
李俊貞 2013a「韓半島 先史・古代 動物 飼育의 歴史와 그 意味」『農業의 考古學』社会評論  
李俊貞 2013b「韓半島 遺跡 出土 家畜 遺存體 一覽表」『農業의 考古學』社会評論  
全南大学校博物館 1999『伏岩里古墳群』  
全南文化財研究所 2015『咸平 金山里 方台形古墳』  
全北大学校博物館 1989『斗洛里 発掘調査報告書』  
全北大学校博物館 2015『南原西谷里 및 斗洛里 32号墳』  
趙現鐘 2014「小考—車輿具을 중심으로」『光州 新昌洞 低湿地 遺蹟Ⅶ—木器 追加報告—』国立光州博物館  
崔夢龍 1976「潭陽 齋月里 百濟古墳과 그 出土遺物」『文化財』第10号 文化財管理局  
韓神大学校博物館 2009『華城 松山洞 農耕遺蹟』  
湖南文化財研究院 2004『潭陽 大峙里 遺蹟』  
湖南文化財研究院 2012『光州 仙岩洞遺蹟Ⅱ』  
湖巖美術館 1997「古墳金屬Ⅰ—高靈 池山洞 出土 遺物—」『湖巖美術館所藏 金東鉉翁蒐集文化財』  
黒澤一男(孔智賢訳) 2009「加平 大成里遺蹟 原49号 豎穴 出土 動物遺存體分析」『加平 大成里遺蹟』京畿文化財  
研究院  
(中国語)  
遼寧省文物考古研究所 2004『五女山城—1996～1999, 2003年桓仁五女山城発掘報告』文物出版社

---

## 図版出典

(筆者実測資料は所蔵機関を括弧で示した)

表1・2, 図1: 筆者作成

図2: [諫早 2012a]

図3: [国立羅州文化財研究所ほか 2017] をもとに筆者作成

図4・5: [国立羅州文化財研究所ほか 2017] より転載

図6: 1- (釜山大学校博物館) [諫早 2011], 2- [松岡町教育委員会ほか 2005] より転載

図7: 1- [嶺南文化財研究院 2013], 2- [全北大学校博物館 1989] より転載

図8: 1- [成正鏞ほか 2006], 2- [慶尚大学校博物館 1998], 3- (国立清州博物館) [諫早 2010a]

図9: 1- (順天大学校博物館) [成正鏞ほか 2007], 2- [遼寧省文物考古研究所 2004], 3- (ソウル大学校博物館) [諫  
早 2008]

図10: 1- [湖南文化財研究院 2004], 2- [遼寧省文物考古研究所 2004]

図11: 1- [国立加耶文化財研究所 2016], 2- [湖巖美術館 1997], 3- [国立文化財研究所 2001], 4- (東京国立博物  
館小倉コレクション), 5- [国立金海博物館 2014]

図12: [金洛中 2010] より転載

図13: [岡内 1979], [国立光州博物館 2002] をもとに筆者作成

図14: [朴章鏞 2012] をもとに筆者作成

図15: [朴天秀 2005] を改変

(京都府立大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月24日受付, 2018年10月1日審査終了)

---

## The Acceptance and Development of Horse Breeding in the Yeongsan River Basin

ISAHAYA Naoto

The *toraijin* (*torai* groups) were the people from overseas, especially from China and Korea, who settled in early Japan and introduced continental culture to the Japanese people. There is a predominant hypothesis that the *toraijin* from the Yeongsan river basin had a significant role to play at the beginning of horse breeding in the Japanese archipelago. The biggest problem with this hypothesis is that it mainly relies on the archeological references related to horses in the Japanese archipelago and the correlations at the level of ruins of the earthenware of the Yeongsan river basin lineage (produced). There is a definite lack of discussion of when and in what circumstances horse breeding began and how did it develop in the Yeongsan river basin. In this paper, we attempt to organize the current situation about the acceptance and development of horse breeding in the Yeongsan river basin. We compile archeological references related to horses excavated from the Jeollanam-do stretch with focus on the Yeongsan river basin, specifically horse trappings and horse remains.

We conducted a chronological analysis of horse trappings excavated from the Yeongsan river basin and ascertained that the period of appearance of horse trappings in the Yeongsan river basin was after the Ungjin period. The period dates back in the late 5th century, which is later compared not only to the other regions of Baekje or Silla and Gaya but also to Wa. Further, we clarify that the genealogy of the horse trappings was diverse and discuss that independent production in the Yeongsan river basin or the horse trappings did not appear under the centralized relationship with the central Baekje. We also conducted an examination of cases of appearance of horse remains, which indicates that the introduction of full-fledged breeding of horses in the Yeongsan river basin was after the Ungjin period. Additionally, the custom of sacrificing horses as part of a funeral ritual that appeared in the Yeongsan river basin was related not to the central Baekje but to Gaya, among others. Although the appearance of significant changes in the Yeongsan river basin society was during the period of the fall of Hanseong and the transfer of the capital to Ungjin as discussed based on various archeological references, the acceptance of horse breeding, at least, cannot be understood through a centralized relationship with the central Baekje. This indicates that relations with the various regions (various groups) of Gaya possibly have a more significant role to play.

Thus, we clarify that the period of the introduction of horse breeding in the Yeongsan river basin was at a later date than what has been stated in the Japanese archipelago. Consequently, one ought to look for the place where the *toraijin* (*torai* groups) who introduced horse breeding to the Japanese archipelago lived previously that is in regions other than the Yeongsan river basin.

Key words: Three-Kingdoms Period, Yeongsan river basin, horse trappings, horse breeding, horse remains